

『遊ぶ』を 社会で 支える

■ 日時：

2013年8月24日(土)～25日(日)

■ 場所：

福岡県立社会教育総合センター

こちらへん

■ 開催趣旨概要：

本集会では、3つの「共」を大切にしました。

全国研究集会で
出会ったみなさんは、
どこからやってきた
のでしょうか？

共

感する

～遊ぶことは
生きること～

共

有する

～明日からの現場に活かせる
実践的な技術や知恵～

共

働する

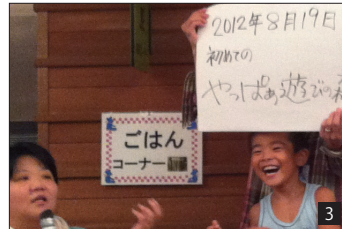
～持ち寄りで、
双方向のやり取りで～



1



2



3

- 1,2,8 基調プログラム
- 3, 懇親会
- 4,2 日目朝ガイダンス
- 5, バザール会場
- 6,9, 全体会
- 7, 七輪の少年



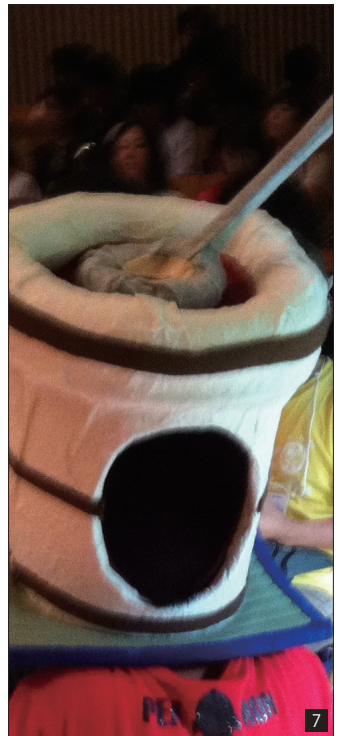
4



5



6



7



8



9

目次

はじめに	5
福岡集会はこうして始まった	6
開催概要	7
基調プログラム報告	14
分科会・モーニングプログラム	
..... 1-1. 子どもの「生」を支える遊び	
..... ～外に出られない子どもの状況をみることで、遊ぶ本質が見えてくる～	17
..... 1-2. 自然の中で「遊ぶ」ということ	18
..... 1-3. 「子育て支援」と冒険遊び場づくり	20
..... 1-4. さあ、はじめよう！ 住民組織のつくり方	24
..... 1-5. 現場で生かす！プログラムづくり&遊具づくりのツボ Ⅰ・Ⅱ	28
..... 1-6. 現場の設え方～配置・動線・遊具づくり～ Ⅰ・Ⅱ	32
..... 2-1. 「遊ぶ」原点を見つめる～震災復興支援の事例から～	33
..... 2-2. 冒険遊び場づくりの行政での位置づけと関わり方	37
..... 2-3. 「遊ぶ資源」としての幼保・学校との関わり方	41
..... 2-4. 「遊び観」を共有する大人の養成	43
..... 2-5. ふだんの生活空間を遊び場に	44
..... 2-6. 事故対応シミュレーション～初級編～	45
..... m-1. 世界の冒険遊び場づくり	48
..... m-4.A たごっこ発、HK T 4 8 劇場	55
..... m-4.B たじみプレーパーク楽風	56
バザールコーナー	59
全体会	60
実行部隊紹介	63
第6回冒険遊び場づくり全国研究集会を終えて	68
参加者アンケートから、参加者数	69
スタッフアンケート	71

はじめに

実行委員長 古賀彩子 (PLAY FUKUOKA)

子どもがいきいきと遊び・育ち・生きる場所を、つくり・守り・支える。冒険遊び場づくりは、子どもたちの「遊ぶ＝生きる」を支えるための土台づくりを担う運動として、都市化の進む全国各地でその大切さが認識され広がってきました。そして、社会の変化のスピードが加速するこれからも、子どもたちが遊ぶ姿がまちから消えてしまわないように、強くしなやかにあり続けなければなりません。

「点と点がつながって、線となり面となり、広がりを見せる。」

今回、初めて海を越えての地方開催。福岡でみなさんとともに過ごした1泊2日は、そんなことを実感できた時間でした。

冒険遊び場・プレーパークに携わる方はもちろん、形としては冒険遊び場ではなくとも、子育て真っ最中の方、保育園や幼稚園で日々子どもと過ごす方、子どもを取り巻く環境に仕組みづくりの面で尽力される行政の方、子どもと大人の中間の世代とも言える学生たち、などなど、子どもに関わる多様な大人が集う時宜にかなった会を開くことができました。社会に暮らす様々な人々が、冒険遊び場づくりにおいて大事にされる理念に共感して集い、言葉を交わし、心を交わす場となったことは大変嬉しいものでした。そして、そのような場が持てたこと自体が、本集会テーマである「『遊ぶ』を社会で支える」を体現する一歩となったようにも思うのです。

空き地は作ろうと思ってできるものではありません。空き地というのは、本来ならまちの隙間にできるものでした。すぐそばに自然とあった「遊ぶ」が肩身の狭い思いをするようになってきた社会の中で、私たちは改めて今の時代なりに「遊ぶ」を問い、見つめ、支えることを考え直しています。それは、本来自然とできるはずの「空き地」をなんとか一生懸命に作ろうとしていることのように、大変難しいことでもあります。しかし、こうして子どもを取り巻く大人が一堂に会して大切にしたい価値観を共有し、「空き地」をそのままにしておいてくれる包容力を養い、「空き地」やその丈夫な土台を新たに創るための智恵を絞ることは、既に各地で実を結んでいるように、子どもたちの今を豊かに彩っています。「『遊ぶ』を社会で支える」——「社会で」というと少し遠くに聞こえてしまうかもしれませんが、こうしてみなさんとお会いできた今、それぞれの方法で前に進んでいけば、「みんなで」ならきっと「遊ぶ」を支えていける、支えていきたいと思いを新たにすることができました。

初めての地方開催、協会事務局と会場事務局の二本立てでの運営の難しさからご不便を感じさせてしまったことも多々あったことと思いますが、その分参加されたみなさんとともに、みんなで創り上げられた会になったように思います。この場を借りて改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

ここでの智恵と遊気の交換が、明日の活力となり、子どもたちがわくわくする日常を未来に繋ぐ英気になることを願います。

福岡集会はどうして始まった

菅 博嗣

1 福岡での開催決定

1998年にはじまった全国研究集会は、3年に一度全国の冒険遊び場づくりの活動仲間が集い語り合う機会です。これまでは、東京で3回、そして西宮と横浜で開催してきました。

「今、福岡が熱い!」「福岡から発信、そして全国からの風も運び込もう!」という提案があって、「それならば!」と、我が国の文化の糸を辿るように福岡での開催を決定しました。

大会代表は、PLAY FUKUOKA 主宰の古賀彩子さんが担い各地の方々を盛り上げてくれました。

2 当初の企画づくりとテーマ設定

大会に向けた意見交換は、福岡と日本冒険遊び場づくり協会の担当理事（埼玉県、千葉県、岡山県）をネットテレビがつないでくれました。会議が始まった頃の様子を少しだけ紹介します。

＜テーマづくりに向けた意見交換＞

開催の意義を大会のテーマとして表現しようということで意見を交換しました。

社会の様子への認識としては、外で遊ぶことの困難さが増している社会状況であるからこそ大会が果たす役割がある。冒険遊び場づくりに関する意見には、野外での遊ぶ機会を保障するという価値を見つめ直す機会である、具体的な展開方法を共有していきたい、質と量を向上させる契機としていきたい。さらには、大会を通じて子どもも大人も含めた「遊び心」こそが話題の中心であることへの認識を深めていきたい、などのやり取りがありました。

大会のテーマは、これらの意見交換を請けて当初の「もっと外で遊びたい!」「遊びを社会で支える」などを経て、最終的には「『遊ぶ』を社会で支える」となりました。「遊び」を「遊ぶ」に変えていった理由は、「play」を名詞としての「遊び」ではなく、動詞としての「遊ぶ」として受けとめよう。そうすることで「遊ぶ」に依じる主語としての「遊び心」がクッキリと意識の上で浮き彫りになってくるだろうから・・・という狙いからです。

＜大会で大切にしていきたいことの意見交換＞

基調講演や分科会の構成などの企画づくりに向けたアイデアを考えて行くために、福岡集会に寄せる思いを交換しました。

「遊ぶことのすばらしさを共感する。」「冒険遊び場づくりは遊びを保障し社会を変えていく手段である。」「冒険遊び場づくりが有効な力をもつためには理念と方法を伴った展開が必要である。」「全国の具体的な工夫を持ち寄り理念的な議論のみに陥ることがないようにする。」「それぞれの活動は『なぜこうしているのか』という考えとともに共有していく。」などのやり取りがありました。

これらの意見を踏まえて、福岡集会で「大切にしていきたいこと」を次のように共有して行きました。

- ・明日からの現場に活かせる実践的な技術や知恵を共有する。
- ・双方向のやり取りで、参加者の持ち寄りで作り上げる。

3 自力開催：今後の展開モデルに

これまでの5回の全国研究集会は、機関や企業への助成金等を請けて開催費の根幹を賄ってきました。

助成金を得られなかった今回は、会員から協会に寄せられた会費と参加費で開催しました。これは、まずは自力で開催できること、そしてさらなるメッセージを込めて社会に広く開催の意義を訴えて協賛を募っていく将来モデルになると思います。

開催資料採録

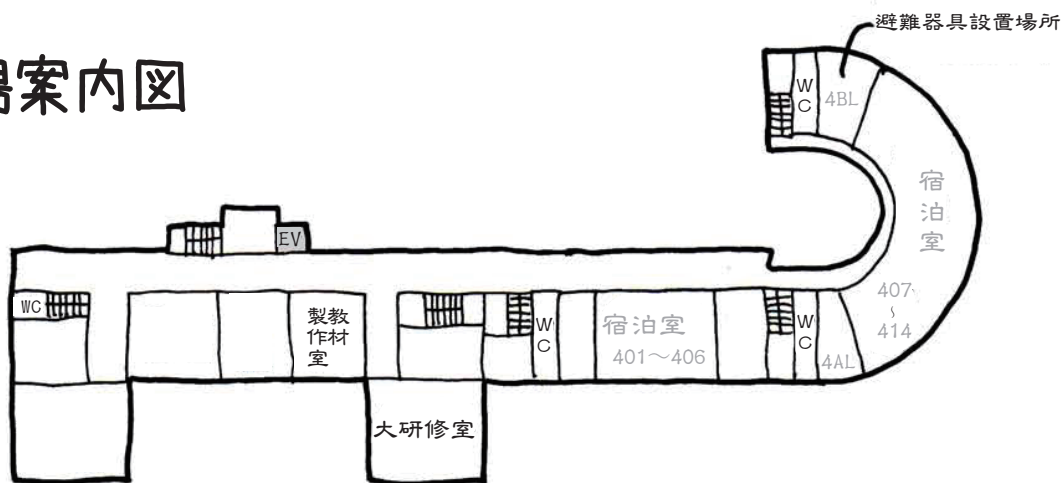
全国集会実行委員会



会場案内図

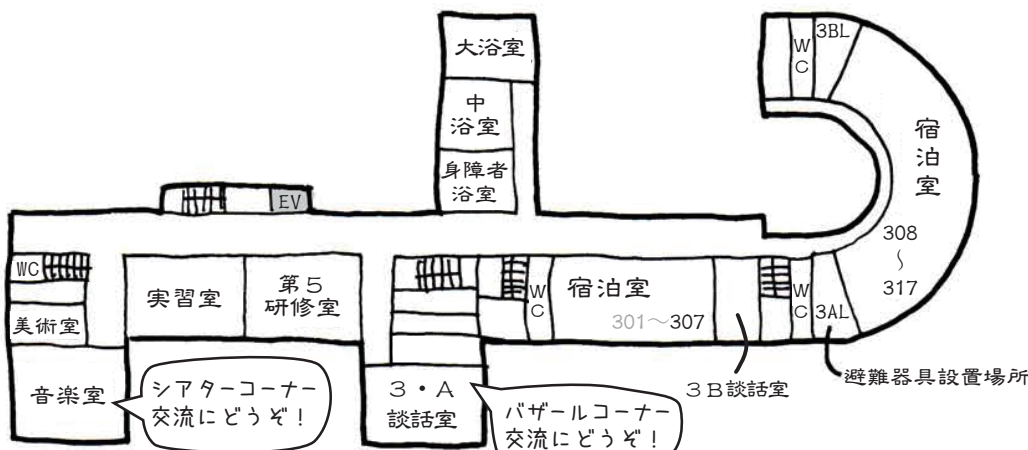
4F

大研修室
教材製作室



3F

第5研修室
実習室
美術室
音楽室
3A談話室
各宿泊室



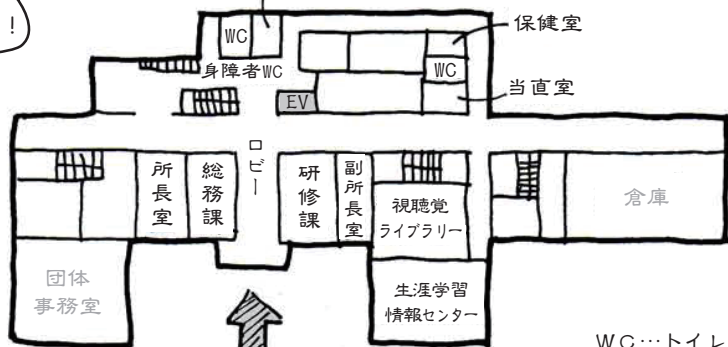
2F

講堂
レストラン
自由研修室
第1研修室
第2研修室
プレイホール
1・2和室
各宿泊室



本部事務局
困ったときはココ!

1F



一般用玄関

WC…トイレ
EV…エレベーター



タイムスケジュール

【8月24日(土)】 11:00～12:00 プレプログラム 12:00～13:00 昼食/受付 13:00～15:00 開会/基調プログラム 15:00～15:10 移動・休憩 15:10～17:10 分科会1 17:15～17:30 タベのつどい 17:30～19:00 入浴 18:00～19:00 夕食 19:00～20:00 休憩 20:00～21:30 懇親会 22:00 消灯	【8月25日(日)】 07:15～07:30 朝のつどい 07:30～08:30 宿泊室の退室 08:00～08:45 朝食 08:45～10:15 モーニングプログラム 10:15～10:30 移動・休憩 10:30～12:30 分科会2 12:30～13:30 昼食 13:30～15:30 全体会 15:30～15:45 閉会
---	--

8/24(土)

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
いらっしゅい! ようこそ福岡へ♪				プレプログラム	受付/昼食	開会&基調プログラム		15:10～17:10 分科会1	移動・休憩	入浴	夕食	懇親会	22:00 消灯			

8/25(日)

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
宿泊室の退室	朝食	モーニングプログラム	移動・休憩	分科会2		昼食	全体会&閉会		さようなら! 気をつけてお帰りください★ また会いましょう (^ ^)							

分科会等もくじ&会場リスト 詳細は次ページからをチェック★



『遊ぶ』を社会で支える」というテーマに3つの視点から迫ります。

- I. 「遊ぶ」を見つめる。
- II. 「仕組み」をつくる。
- III. 「現場のノウハウ」を共有する

<分科会1>

1-1. 子どもの「生」を支える遊び	【会場：大研修室】
1-2. 自然の中で「遊ぶ」ということ	【会場：第5研修室】
1-3. 「子育て支援」と冒険遊び場づくり	【会場：教材製作室】
1-4. さあ、はじめよう! 住民組織のつくり方	【会場：自由研修室】
1-5. 現場で生かす! プログラムづくり&遊具づくりのツボI	【会場：美術室】
1-6. 現場の設え方～配置・動線・遊具づくり～I	【会場：実習室(集合)】

「基調プログラム」
「全体会&閉会」は
【講堂】で開催です!

<モーニングプログラム>

m-1. 世界の冒険遊び場づくり	【会場：第5研修室】
m-2. 現場で生かす! プログラムづくり&遊具づくりのツボII	【会場：自由研修室】
m-3. 現場の設え方～配置・動線・遊具づくり～II	【会場：実習室】
m-4. たごっこ発、HKT48劇場	【会場：大研修室】



<分科会2>

2-1. 「遊ぶ」原点を見つめる～震災復興支援の事例から～	【会場：第5研修室】
2-2. 冒険遊び場(プレーパーク/プレイパーク)づくりの 行政での位置づけと関わり方	【会場：教材製作室】
2-3. 「遊ぶ資源」としての幼保・学校との関わり方	【会場：美術室】
2-4. 「遊び観」を共有する大人の養成	【会場：大研修室】
2-5. ふだんの生活空間を遊び場に	【会場：自由研修室】
2-6. 事故対応シミュレーション～初級編～	【会場：第2研修室】

「バザールコーナー」
は【3A談話室】、
「シアターコーナー」
は【音楽室】です!

オプション・プログラム

バザールコーナー 会場：3A談話室&懇親会場

- ★みなさんがお持ちのグッズや資料等を、有料で（もちろん無料でも！）おすそ分けできるバザールコーナーを「3A談話室」に設置します（のんびり語らうのもOK！）。夕食後の空き時間などに積極的にご利用ください。懇親会時には、移動販売も予定しています。
- ★今回は、グッズや資料等が、作られた方々の思いとともにお届けしてもらえるように、持ち込まれる方ご自身で販売いただきます。金銭管理等一切をご自身の責任のもとお願いいたします。
- ★参加者のみなさんも、ぜひ積極的に顔を出して下さいね♪

シアターコーナー

会場：音楽室

- ★スクリーンとプロジェクタを用意したシアターコーナーを設置しています。基調プログラムでは時間の都合上流しきれないVTRの続きのほか、ぜひみなさんの自作の活動紹介や、TV放映された録画などをお持ち寄りいただき、共有できる場を設けています。
 - ★空き時間には、ぜひ気軽にお立ち寄りください！映像の持ち寄りも大歓迎です！
- (担当：PLAY FUKUOKA 本山)

会場の利用にあたって

食事について

- ★食事会場はすべて「レストランそよかぜ」です。バイキング形式となっております。
- ★当日は、他団体も多く利用されていますので、指定の時間内での食事、および席の譲り合いにご協力ください。

入浴について

- ★入浴時間は24日(土)17:30～19:00です。
- ★他団体の方も多く利用されておりますので、うまく時間をみつけて、入浴を済ませていただければと思います。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

懇親会について

- ★懇親会会場は、食事会場と同じく「レストランそよかぜ」です。時間は20:00～21:30となっております。（夕食後はレストランの清掃が入りますので、夕食後そのまま居ることはできません。掃除が終わり次第、入ることが可能です。ぜひその空き時間を、語らうもよし、バザールコーナー・シアターコーナーに行くもよし、有意義にご活用ください！）
- ★懇親会では、最初の1杯&乾きものは、懇親会費500円として既に徴収させていただいておりますが、2杯目からは有料となります。
- ★懇親会を盛り上げるために、「みんなに伝えたい！」「一発芸したい！」という方大募集！ぜひ気軽に、担当スタッフにお声かけください。(担当：PLAY FUKUOKA 友永)

その他連絡事項

- ★施設の利用者全員が参加することになっている「タベのつどい」「朝のつどい」があります。ラジオ体操から始まる夏の一日を、みなさまと一緒に楽しめれば嬉しいです(笑)。
- ★今回会場となる福岡県立社会教育総合センターは、少年自然の家(宿泊施設)を併設する社会教育を推進する公共施設です。みなさまが快適に過ごせるよう、当施設の利用規則の順守をお願いします。喫煙スペースは各自ご確認ください。消灯は22時となっております。
- ★貴重品の管理は、各自でお願いします。宿泊室を離れるときなども、貴重品は必ず身につけるようにしてください。
- ★何か困ったこと・わからないことがありましたら、施設の方ではなく、「全国研究集会事務局」スタッフにお声かけください！

シークレットフレンドにメッセージを贈ろう

あなたの「秘密の友人」はだれですか？

手元にもらったはがきを確かめてください。そこにある名前は全く知らない人がもしれませんし、よく知っている人がもしれませんが、その人があなたのシークレットフレンドです。会期中、あなたは自分が誰のシークレットフレンドかということをお明かしはいけません。心に秘めたまま、シークレットフレンドをこっそり観察したり、一緒にお話したり、遊んだり楽しんでください。そして、閉会前にいよいよ秘密をお明かすときがやってきます。2日目の昼食まで、全体会が始まる前までに、手元のはがきに、2日間で募らせた想いを込めて、お手紙をしたためておいてください。どうぞ、全国からお集りのみなさんに、福岡での出会いが素晴らしいものとなりますように。

基調プログラム「『遊ぶ（冒険遊び場づくり）』で目指すもの」

【日時】 24日（土） 13:00～15:00 【会場】 講堂

「遊ぶ」って何？

私が私であるために「遊ぶ」はとても大切なこと。

私のことではあるけれど、それを社会で支える。

そのひとつが冒険遊び場づくり。

ビデオでの問題提起は、我が国での冒険遊び場づくりをはじめたお一人である大村虔一さんと子どもの地域環境づくり活動や感性コミュニケーションを研究する南博文さんから頂きます。

続くパネルディスカッションでは、福岡の活動で「遊ぶ」を発信する古賀彩子さん、震災復興から「遊ぶ」を語る須永力さん、身近な場所で今の「遊ぶ」に取り組む西川正さん、子どもの居場所での「また明日ね」を問いかける渡部達也さんに登場頂きます。

進行は、古賀久貴、菅博嗣。

全国研究集会のスタートにふさわしい、なかなか実現できない顔ぶれです！

多いに語り合いましょう！是非ご参加下さい。

問題提起：冒険遊び場づくりで何をを目指すのか？

- **大村 虔一（NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会代表）**

「冒険遊び場づくりで成し遂げようとしていることは？」 ※ VTR 出演

- **南 博文（九州大学大学院人間環境学府教授）**

「『みんな』の『わたしの場所』としての冒険遊び場づくり」 ※ VTR 出演

パネルディスカッション：『遊ぶ』を社会で支える

<パネリスト>

- **古賀 彩子（PLAY FUKUOKA）**
- **須永 力（NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会）**
- **西川 正（NPO 法人ハズオンさいたま）**
- **渡部 達也（NPO 法人ゆめ・まち・ねっと）**



<プレプログラム>

【日時】 24日（土） 11:00～12:00 【会場】 講堂

プレプログラムでは、ビデオやスライドショーの上映を予定しています。

懇親会

【日時】 24日 (土) 20:00~21:30 【会場】 レストランそよ風

お楽しみの懇親会!

ワイワイおしゃべりするもよし、じっくり話し合うもよし、めったに会えない全国の参加者と交流を深めましょう。

<モーニングプログラム>

【日時】 25日 (日) 8:45~10:15

m-1. 世界の冒険遊び場づくり

【会場】 第5研修室

1943年にデンマークの「廃材遊び場」から世界各地に広がった冒険遊び場づくり。近年では、香港でも動きが始まりました。こうした冒険遊び場づくりを写真や映像で追いかけます。また2013年の国連における『子どもの権利条約第31条』の動きも話題にも触れていきます。

【担当】 嶋村仁志 (日本冒険遊び場づくり協会理事、IPA 日本支部)

【講師】 梶木典子 (日本冒険遊び場づくり協会副代表、IPA 日本支部)

m-2. 現場で生かす! プログラムづくり&遊具づくりのツボ II

【会場】 自由研修室

大きなシャボン玉、遊ぼうパン、熱気球、、、次回のネタ尽きちゃった?

そんなアナタと考えたい 新しい遊びのタネ!

「こんなことしたらね、こどもがね…」

それぞれのアイディア・実践を持ち寄って、さらに楽しい遊び場づくりのお話しをしましょう。

【担当】 谷居早智世 (埼玉冒険遊び場づくり連絡会)

【講師】 野下健 (日本冒険遊び場づくり協会理事)

m-3. 現場の設え方~配置・動線・遊具づくり~ II

【会場】 実習室

子どもが「やってみたい!」と思い、動きだしたくなるような遊び場。自ら育ちたい、もっともっとやりたいという意欲を引き出す「遊育する環境」とはどういうものだろう。

実際に現地に立ち、遊び場をデザインする。そこからさまざまな要素を考えます。

【担当】 天野秀昭 (日本冒険遊び場づくり協会理事)

【講師】 折居弘滋 (PLAY FUKUOKA)

m-4. たごっこ発、HKT48劇場

【会場】 大研修室

たごっこパークのHハチャメチャ・Kかたして (仲間に入れて)・Tたまがった (驚いた) 名珍場面48シーンをお届けします。

【担当】 渡部達也 (NPO 法人ゆめ・まち・ねっと)

<全体会>

【日時】 25日 (日) 13:30~15:30

2日間のプログラムをふりかえりながら、あらためて『遊ぶ』を社会で支えるということについて、参加者みんなで考えます。

<分科会 1>

【日時】 24日(土) 15:10~17:10

1-1. 子どもの「生」を支える遊び

～外に出られない子どもの状況を見ることで、遊ぶ本質が見えてくる～

【会場】 大研修室

子どもたちにとって遊びはどのような存在なのか。様々な状況下にある子どもたちの様子と、冒険遊び場での様子を照らし合わせて考えることで、子どもの心理や遊ぶ本質に迫ります。

【担当】 久野美智子（聖路加国際病院こども医療支援室臨床心理士・元羽根木プレーパーク世話人）

【講師】 中川たくま（青い月 / デザイナー）

【講師】 宝地拓也（鹿児島県鹿屋市立西原小学校教諭）

1-2. 自然の中で「遊ぶ」ということ

【会場】 第5研修室

「子どもがやりたいように遊ぶと、自然が壊される？」

子どもがやりたいことにチャレンジしていくこと。自然に抱かれ自然を受け止めていくこと。いのちを通い合わせ、互いを生かし、共存していくためにはどうすればよいのか。自然との関わりを通して、「遊ぶ」ということを考えます。

【担当】 古賀久貴（日本冒険遊び場づくり協会理事）

【講師】 志賀壮史（NPO 法人グリーンシティ福岡）

【講師】 菅博嗣（日本冒険遊び場づくり協会理事）

1-3. 「子育て支援」と冒険遊び場づくり

【会場】 教材製作室

「乳幼児が野外で遊んだら、こんなワクワクが拡がりました！」

たくさんのママたちがナットク！～外遊びで、人とのやりとり・関わりの中でこそ子どもは育つんですね。「コミュニティワークとしての子育て支援と冒険遊び場づくり」を見つめます。

【担当】 岩丸明江（NPO 法人北九州子育て・親育ちエンパワメントセンター Bee 理事）

【講師】 横山正幸（福岡教育大学名誉教授）

【事例報告】 森山香代子（霧丘のあのお）

1-4. さあ、はじめよう！ 住民組織のつくり方

【会場】 自由研修室

地域住民が主体的に活動しながら地域や行政を動かしてきた。子育て講座からスタートした親が学びと体験を重ねて主体的に活動するようになった。福岡における各団体の取り組みの紹介を通じて、住民組織のつくり方や運営方法、そして冒険遊び場づくり活動の多種多様を語り合しましょう。

【コーディネーター】 相戸晴子（NPO法人子育て市民活動サポートwill）

【リレートーク登壇者】 佐伯美保（NPO法人プレーパークふくつ・ふくつ子どもステーション"すてっぷ"）

木ノ原元美（元飯塚市穎田公民館）

藤原浩美（子ども支援ネットワークWith Wind）

濱田美穂（たがわ子育て支援コミュニティたがわんわ）

秋葉祐三子（ひびき親子あそび研究会）

大谷佳那（冒険おかがき）

村田泉美（K I S H・霧丘いっしょに外遊びを広げよう実行委員会）

1-5. 現場で生かす！プログラムづくり&遊具づくりのツボ I

【会場】 美術室

大きなシャボン玉、遊ぼうパン、熱気球、、、次回のネタ尽きちゃった？

そんなアナタと考えたい 新しい遊びのタネ！

「こんなことしたらね、こどもがね…」

それぞれのアイデア・実践を持ち寄って、さらに楽しい遊び場づくりのお話しをしましょう。

【担当】 谷居早智世（埼玉冒険遊び場づくり連絡会）

【講師】 野下健（日本冒険遊び場づくり協会理事）

1-6. 現場の設え方～配置・動線・遊具づくり～ I

【会場】 実習室（集合）

子どもが「やってみよう！」と思い、動きだしたくなるような遊び場。自ら育ちたい、もっともつとやりたいという意欲を引き出す「遊育する環境」とはどういうものだろう。

実際に現地に立ち、遊び場をデザインする。そこからさまざまな要素を考えます。

【担当】 天野秀昭（日本冒険遊び場づくり協会理事）

【講師】 折居弘滋（PLAY FUKUOKA）

<分科会 2>

【日時】 25日(日) 10:30~12:30

2-1. 「遊ぶ」原点を見つめる～震災復興支援の事例から～

【会場】 第5研修室

「食う・寝る・遊ぶ」というように、「遊ぶ」は生きていくために不可欠なもの。子どもたちにとって、思い切り「遊ぶ」ことは自らを癒していく力。震災後に東北では、多くの遊び場づくりがはじまりました。震災復興支援の中で見えてきた、「遊ぶ」の原点を見つめます。

【担当】 須永力（日本冒険遊び場づくり協会理事：震災復興支援担当）

【講師】 神林俊一（気仙沼あそびーぱー）

【講師】 渡部達也（NPO 法人ゆめ・まち・ねっと）

2-2. 冒険遊び場（プレーパーク/プレイパーク）づくりの行政での位置づけと関わり方 【会場】 教材製作室

「遊ぶ」は、人としてとても大切なこと。「行政」が「遊ぶ」を支える意義は何か？私たちは「行政」に何を期待するのでしょうか？行政任せにすることではありません。先行する事例を紐解きながら、『行政がそして市民が担う「遊ぶ」』を考えていきましょう。

【担当】 藤原浩美（むなかたプレーパーク）

【講師】 佐伯美保（わくわくプレーパーク福津）

【講師】 菅博嗣（日本冒険遊び場づくり協会理事、あいランドスケープ研究所）

【講師】 関戸まゆみ（日本冒険遊び場づくり協会副代表）

2-3. 「遊ぶ資源」としての幼保・学校との関わり方

【会場】 美術室

子どもの日常生活の場所、子どもが居る場、それは幼稚園、保育園、学校。

「遊びの場づくり」という切り口から見たとき、幼保・学校はどう見えてくるのでしょうか。

子どもの遊びと幼保・学校が、楽しい関係になるために必要なことを一緒に考えましょう。

【担当】 古野陽一（NPO法人子どもとメディア専務理事）

【講師】 正田克宏（福岡市放課後子ども育成課 遊び場づくり係長（わいわい広場担当））

【講師】 菅千恵子（だいたすきようちえんプロジェクト担当者）

2-4. 「遊び観」を共有する大人の養成

【会場】 大研修室

学童保育や放課後の遊び場に関わる大人は、遊び観を培っていききたい。福岡市で毎年実施している「プレイワーカー（遊びのサポーター）養成講座」、また2008年からの学生プレイワーカーの育成も取り組んでいます。大人が学ぶ「遊び観」について話題にしましょう。

【担当】 山下智也（きんしゃいきゃんぱす代表、西日本短期大学助教、PLAY FUKUOKA）

2-5. ふだんの生活空間を遊び場に

【会場】 自由研修室

家のすぐそばは、子どもにとっても大切な空間。「ストリート・パーティー」「プレイ・ストリート」。そして七輪を置いたら、あら不思議。「ねえねえ、何やってるの？」と、湧き出る遊びゴコロとおしゃべりの声。住む人中心の空間に取り戻す「遊ぶ風景」について考えましょう。

【担当】 たけざわまき（一畳プレーパーク）

【講師】 西川正（NPO 法人ハンズオン埼玉）

【講師】 嶋村仁志（日本冒険遊び場づくり協会理事、TokyoPlay）

2-6. 事故対応シミュレーション～初級編～

【会場】 第2研修室

冒険遊び場で事故発生！その時、みなさんはどのように対応していますか？

むやみに危険をこわがらない為に。ぜひ、一緒にシミュレーションしましょう。具体的な事例を元に、事故発生時の対応と連携、そして、事故発生後に付随するトラブルへの対応を考えます。

【担当】 森川和加子（NPO 法人プレーパークせたがや）

【講師】 大垣内弘美（NPO 法人プレーパークせたがや）



contents

- p1 巻頭特集 全国研究集会
基調プログラム
『遊ぶ(冒険遊び場づくり)』
で目指すもの
- p4 プレーリーダー研究所
新人 PL はミタ
～若手プレーリーダー、全国集会见聞録!～
- p8 みどりのやねから

遊び あふれる まちへ

連続特集

行ってきました! 『全国研究集会』

去る8/24・25日に福岡で開かれた「第6回冒険遊び場づくり全国研究集会」(長いので以下「全国集会」)。前号では福岡スタッフのゆる〜くも気合の入った準備の模様をお伝えしましたが、その甲斐あって大成功。今号では編集部の面々がこの目で見て、感じてきた、全国集会の魅力をお伝えします。

基調プログラム『遊ぶ(冒険遊び場づくり)』で目指すもの



さあ、始まりました。3年に一度の全国集会。テーマは「遊ぶ」を社会で支える。実行委員長の古賀彩子さんと、日本冒険遊び場づくり協会(以下「協会」)新代表の関戸まゆみさんの開会挨拶に続いて、基調プログラムが大村慶一さんからのビデオメッセージでスタートです。



おむら けんいち
大村 慶一

1938年生。1975年日本で最初の冒険遊び場づくりを始める。協会代表(全国集会時点)。都市計画家。



「遊び」が、わたしたちの まちを、社会をつくる。

遊び場づくり活動というのは、きちんと創造的な意見を言いあいながら、自分たちの暮らしてゆくまちをつくっていくという意味で、まちづくり、社会づくりの身近な実践の場なのです。そして、人間の社会にとって必要なのは、見つけること。発見することです。学問や

芸術における探求と同じように、子どもには遊びを通して知らないものを追いかけることが大切なことです。この楽しさを知らずに育つと、マニュアルどおりで満足するようになつまらない大人ばかりの社会ができてしまうのではないのでしょうか。

すながつとむ
須永 力(ぶんちや)

1964年生。「羽根木プレーパーク」「静岡県富士山こども国」「仙台市海岸公園冒険広場」などのプレーリーダーを経て、協会震災復興支援事業担当。

日常が壊されて、「遊ぶ」 ことの自然さに気づく。



震災前の日常とは、子どもが遊びにくい、遊びを制限されているという全国どこで

も見られる不自然な日常だったのです。被災地ではその不自然な日常が壊された

わけですが、そのあと、子どもは「遊ぶ」というごく自然な行動を通して元気になる、ということに気づいた大人たちがいっぱいいて、その人達の要請で私は遊び場の出前をやっています。津波にしても地震にしても、これからも自然災害はあるのだから、その自然のなせる業に対抗するのは自然の力しかない。子どもたちには遊びを通じて身につける自然の力で対抗してほしいと思っています。



こが あやこ
★古賀 彩子

1962年生。22歳のときに無人島キャンプにスタッフとして参加したことがきっかけでプレーワーカーの道に。PLAY FUKUOKA 代表。

しっかり遊び切った子どもなら、壁を乗り越えることができる。



続いてパネルディスカッション。司会の古賀久貴(Q)さんから「遊ぶ」と「社会」という視点をそれぞれに持った4名のパネリストが紹介されました。途中、九州大学の南さんのビデオメッセージをはさんで進行します。



遊びで一番大切なのは、子ども自身が「やってみたい!」と思う気持ち。やりたいことだからこそ集中して取り組み、やりきって満足し、自信を得て次のステップへと進むことができます。日常生活の中でどれだけワクワク・ドキドキできるか。子どもの育ちに必要なのはその積み重ねです。しっかり遊び切った子どもは、大きくなって目の前に目標や壁が立ちはだかった時、それを遊びと同じ感覚でとらえて自ら乗り越えることが少なくありません。それは、充実した遊びの経験を通じて、生きていく力が養われるからです。

そして、大切にしてきたことは、子どもの力を信じること。力を引き出せる環境づくりです。本当に危険なことは注意しなければいけません。チャレンジすること、やってみることは大切。子どもの側に立ってできるかぎり見守りましょう。子どもは皆、秘めた力を持っています。大人がすべきことは、その力をどう引き出すか、そのためにどう関わればよいかを考え、「おもしろい!」「やってみたい!」と思ったり、発見や気づきのある環境を工夫すること。子どもにきっかけをあたえること。そして、子どもが成長したときに必要な力とは何か。大人は子どもの未来を見据えて見通しをもった子育て感を持つことです。



かぶりケーション
中にも七輪人間になれる!?
(作 西川正)

みなみひろふみ
★南 博文

1957年生。九州大学人間環境学府教授。商店街の空き店舗を、子どもたちのたまり場として地域に開いていった「きんしゃいきゃんぱす」の後見人。

子どもがコモンズを見せてくれる。



コモンズ、言ってみれば「みんなの場所」。社会におけるこのコモンズのありかを見せてくれるのが、子どもたちの遊びなのです。メダカや赤トンボ、セミにしても、子どもたちが夢中で追っかけるものは、大人の経

済効率の論理にとっては何の価値もないように見えて、実は自然界を維持してゆく上では重要な地球の共有財産(コモンズ)です。都会の暮らしの中でも、子どもは夢中になるもの、大人から見ると何の意味も無いと

見えるものを見つけて追いかけます。たとえば下校の途中に素敵な階段があれば「チョコレイト」ですよ。子どもたちは、そういったもので遊ぶことで、あるいはそういったものが見つからないのであればあまり遊ばないという行動で、その社会におけるコモンズのあり様を教えてくれるのです。プレーリーダーは、遊びを通していちばん子どもたちの近くにいる大人なので、子どもたちが発している、このコモンズについてのサインをキャッチできる、社会のアンテナになってほしいと思います。

にしかわただし
★西川 正

父親が子育てや街のことに参加するきっかけをつくる「おとうさんのやきいもタイム」や、「商店街の路上落書きタイム」、変装会議のご存知「かぶりケーション」など、えっ!?という活動をつぎつぎ繰り出すひと。中間支援NPO「ハンスオン! 埼玉」常務理事。



子どもが遊べないのは、大人が苦情ばかりを言う社会だから。

いま「苦情」ってやつがどんどん増殖中です。いつも「誰のせいかな?」ばかりが気になって、孤立して生活している、そんな閉塞感に満ちた社会になってきている気がします。焚き火は、その象徴。焚き火がまちなかでできなくなるのは、互いの顔が見えなくなっていくからです。

焚き火をすると煙が出る→近所の人(直接言いにいわずに)役所に電話して苦情を言う→しかたなく役所はそれを禁止する。つまり、人と人が直接コミュニケーションをとることをやめると、焚き火は消えるのです。で、プレーパークの人たちは「苦情が来たら、直接言いに来るように言って下さい」って役所に言うわけですよ



ね。私はそれこそが「新しい公共」だと思っています。プレパ、かっけー! 焚き火と子どもの共通点は、どちらも①おもしろい、そして②めいわく(笑)。焚き火ができる社会は、子どもが遊べる社会。しかし大人たちが立場ばかりで苦情を言って、「おりあい」をつけようとしなのが現代社会。だからこそ、一緒にたべたり、あそんだり、かぶったりして、気持ちをゆるめて、人として出会っていけるしかけを考えたいと思っています。

(→P.3「ここで一分講座」も見てね)



子どもを変えるのではなく、社会を変えたい。



わたなべ たつや
★渡部 達也 (たっちゃん)

1965年生。静岡県職員として富士山こどもの国の立ち上げを担当。ここでのぶんちゃんとの出会いが転機となり、県庁を辞め、子どもの居場所づくりNPO「ゆめ・まち・ねっと」を設立。

冒険遊び場をやっていると、いろいろと生きづらさを抱えた子どもたちと出会うんですね。たとえば、家出を繰り返している少女とか、長く不登校になっている中学生とか、障害のある子とか。こうした子たちはときに取り巻く人間関係から撤退しようとする。反発する形や、引きこもる形で。それは、その子たちなりの「今の社会、おかしいんじゃないの?」っていう表現なんだと思うんです。で、そういう反社会的・非社会的な行動を示す子どもたちに対して、大人たちは、それを欠点・短所・問題行為とみなして、「その行動を直さないと、もう一度社会に復帰できないぞ」などと言う。その結果、子どもたちは孤立無援な状況に追い込まれて、ますます自己肯定感を失っていく。そんな社会にあって、冒険遊び場は、参加費無料、親の申込み不要、いつ来ていつ帰ってもいいという運営をしている。塾や習い事や義務教育と違って、子どもたち自身が選んで、来てくれる場になっている。

なぜ生きづらさを抱えた子どもたちも冒険遊び場を選ぶのかと考えると、そこに自由を感じるからではないか。それぞれが持つ持ち味を存分に発揮していいんだという自由を遊び場に感じるからだと思うのです。だからこそ僕は、この場で、遊ぶという自由を、そしてその先にある子どもたちの希望を、支えていきたいなと思っています。我々のやるべきは、社会のための子どもをつくることではなくて、子どもがそのまま生き生きと生きられる社会をつくることではないでしょうか。

この石を どうやって どけてあげたらいいか。

日常生活の中で、自分ひとりではどうにも乗り越えられないもの、排除できないものがあって、生活が思うようにいかないんだ

という状況、それが生きづらさというものではないでしょうか。それがまさに障碍の「碍」の字の意味です。そう考えると、生きづらさを抱えた子どもたちの生活の流れをせき止めている石をどけてあげたり、石をよけて違う流れを創ってあげたりしたいわけです。



僕らは冒険遊び場という場を開くことで、生きづらさを抱えた子どもたちに出会えるのだから、石をどけたり、違う流れを創ったりという実践を続けていくことが大切で、それが社会を変えることにつながっていくんじゃないかと思っています。

ここで1分講座! 楽しいやきいもタイムの作り方

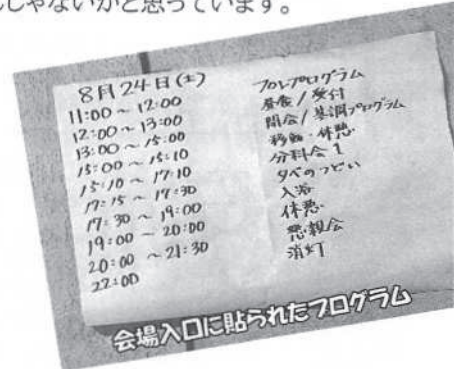
by Tadashi Nishikawa

あるいは社会

- ①運営者はなるべく働かない。参加者にやってもらう。
- ②お芋も落ち葉もなるべく持ち寄る。準備し過ぎない。そしたら、じゃがいもとかサンマとかもってくる人がいる。
- ③いつ、どこで、どんなふうにする?をはじめからみんなで相談する。
- ④一緒にやる。準備も片付けも「一緒にやりましょう」と声をかける。

スタッフの役割は、たとえばにっこり笑って鰯石を渡すこと。みんなのあそびどころに火をつけること。そして火がついたあとのお手伝い。まとめると、「一緒に」つくること。「お客さん」にしないこと。

こんなふうな、気持ちを受け止めてくれる人、場であることがわかれば、そして気持ちに遊びが生まれたなら、苦情などというものの言い方はなくなるのではないのでしょうか。人の柄がわかりあえば、騒音だってBGMになったりしますよね。



このあとも「質問タイム」、放射能と向き合う福島県南相馬の高橋慶(ザック)さんからの報告など、熱い時間が続くのですが、限りある紙面なので基調プログラムの報告はこのへんで…。まだまだ全国集会レポートは続きます。



P.1-P.3 文責 林直樹(はやしつぷ)

こどもの「生」を支える遊び ～外に出られないこどもの状況を見ることで、遊ぶ本質が見えてくる～

子どもたちにとって遊びはどのような存在なのか。様々な状況下にある子どもたちの様子と、冒険遊び場での様子を照らし合わせて考えることで、子どもの心理や遊ぶ本質に迫ります。

【担当】久野美智子【講師】中川たくま、宝地拓也

中川たくま

青い月/デザイナー

デザイナーとして社会的養護、子育て支援、障がい児支援などに関わってきた経験から子どもとデザインについての話を行いました。遊び場づくりはとても意義のある活動であると同時に、子どもたちだけではなく、地域住人の交流の場としても更なる可能性を秘めています。様々な人たちが気軽に遊びに来れるような、広報アプローチの必要性も感じています。現場で頑張っている皆さんの話を伺えたので、何か力になればと思っています。

久野 美智子

聖路加国際病院こども
医療支援室臨床心理士
元羽根木プレーパーク
世話人

医療現場で子どもたちと「生きること、死ぬこと」について話をするとき、遊びはポジティブな感情を生み出すだけでなく、ネガティブな感情をその子らしく受け入れる支えとなってくれることを痛感しています。そんなことを遊び場づくりに関係する皆さんと語り合えたら、この分科会を企画しました。限られた時間のなかで、思いを伝えることの難しさなどもありましたが、今回は参加して下さった皆さんが、ほんの少しでもこれまでになかった視点を持って頂けるきっかけとしていただけたら幸いです。

宝地拓也

鹿児島県鹿屋市立
西原小学校教諭

全国集会の分科会に、子どもに関わる1人として参加できたことを大変うれしく思う。子どもたちが主人公の学校現場に、1日中一緒に過ごしていると「遊び」の要素はあらゆる場面に潜んでいる。気付かずに時が流れていくことなんてよくあることだろう。しかし、全国集会に参加し、少しでも多くの子どもたちに、「遊び(学び)」を通して『生きていくことの楽しさ』を伝えていきたいと改めて感じた。明日はどんな出来事が…

自然の中で「遊ぶ」ということ

「子どもがやりたいように遊ぶと、自然が壊される？」

子どもがやりたいことにチャレンジしていくこと。自然に抱かれ自然を受け止めていくこと。いのちを通い合わせ、互いを生かし、共存していくためにはどうすればよいのか。自然との関わりを通して、「遊ぶ」ということを考えます。

【担当】古賀久貴 【講師】志賀壮史、菅博嗣

古賀久貴

NPO 法人
日本冒険遊び場づくり
協会理事

志賀壮史

NPO 法人
グリーンシティ福岡

菅博嗣

NPO 法人
日本冒険遊び場づくり
協会理事

いまあの時の分科会を振り返って思うこと

子どもが自然環境の中で遊ぶことの大切さは社会全般で理解はされるが、実態としては大切にされているとは言い難い。そんな中、「子ども自身が遊びを作ったり壊したりしながら、やってみたいことに挑戦できる遊び場」である冒険遊び場づくりの取り組みは自然遊びというキーワードでは共感を得やすい。一方で自然遊びの中にも幅はあり、「自然で遊ばなければならない」ことや「自然を一切傷つけずに体験する」ことなどに見られる大人の尺度とは衝突することも多く、冒険遊び場づくりが広がっている昨今はこういった問題も多々聞いていた。

この分科会では「自然の中で遊ぶということはどういうことなのか？」に始まり、「自然との遊びを通じた付き合い方は？」や「遊びと自然体験の違いは？」などの話題が参加者自身の自然遊び体験を紐解く中で浮上り議論が展開していった。単なる外遊びの場として捉えた広げ方が進みにくい昨今、「自然がなぜ良いのか？」「自然をどう使うと良いのか？」「真の意味での体験とは何か？」といった新たな共感の輪の広げ方のヒントがたっぷり詰まった時間が流れていた。



「子育て支援」と冒険遊び場づくり

「乳幼児が野外で遊んだら、こんなワクワクが拡がりました！」

たくさんのママたちがナットク！～外遊びで、人とのやりとり・関わりの中でこそ子どもは育つんですね。「コミュニティワークとしての子育て支援と冒険遊び場づくり」を見つめます。

【担当】岩丸明江【講師】横山正幸【事例報告】森山香代子

「子育て支援」と冒険遊び場づくり

■森山香代子さんからの話題（霧丘のあのお）

森山香代子

霧丘のあのお

1. 霧丘のあのお

- ・室内の遊び場だった月2回の霧丘のあのお、月1回を外遊びに。
- ・折居さん手作りの木のおもちゃに、大人も子どもも大喜び。
- ・「子どもたちいっぱい外で遊べるね。」嬉しそうなスタッフ。

2. 外遊び講座（NPO法人北九州子育て親育ち・エンパワメントセンターB e e主催）

- ・外遊びはどの子にも必要。
- ・外遊びで母子手帳に書いてあること、クリアーできる。外遊びすると、よく食べ、よく寝て、元気に育つ。
- ・外遊びをしたらいい子になる！
- ・外遊びは、室内より遊びが広がる。
- ・赤ちゃんからの幼児教室で大事にされている教育も、外遊びの中で自然に身に付く。

3. 霧丘ゆあゆあ

- ・のあのおの方にサポートしていただき、ママたちで月1回外遊びを始める。
- ・乳幼児から高齢者まで多世代と出会い、関われる場。
- ・生後1か月から外遊び。
- ・のあのおの方の子ども遊びを大事に思う温かい関わりが、子育てに影響してきた。

4. プレイワーカー養成講座

- ・今は自分が育った環境と違い自由に遊べないこと、そして、プレイパークの大切さを感じた。(夫)
- ・子どもの遊びを大切に思っ下さる方が沢山いることが嬉しくて、心強く思う。
- ・ずっと家の中で遊ばせてる親に外遊びの大切さを理解してもらうにはどうしたらいいのだろう？

5. 福津、宗像プレイパーク視察

- ・生き生きと幸せそうに遊ぶ小学生。
- ・うちの子も、近所の子も、こんな子どもになって欲しい。

6. きりがおかプレイパーク（月1回 第一土曜日）

運営：K I S H（霧丘いっしょに外遊びを拡げよう実行委員会）

- ・地域の方たち、まちづくり協議会会長・主任児童委員もいっしょに、K I S H結成
- ・子どもたちの遊びや体験の大切さをみんなで共有できる街になりたい！という思いより、乳幼児から大人対象のプレイパークはじまる。

「子育て支援」と冒険遊び場づくり

■岩丸明江さんからの話題（NPO法人北九州子育て・親育ちエンパワメントセンターBee）

岩丸明江

NPO 法人
北九州子育て・親育ち
エンパワメントセンター
Bee 理事

外遊び講座とその拡がり

① Bee の取り組み～北九大での外遊び講座の概要

●2008年 北九州市立大学でミニプレーパーク開始

第1回外遊び講座開始（5回連続）

●以後、～2013年 3回連続講座として実施（主に小倉南区で）

第1回のねらい：自分が好きだった遊び、夢中になっていた遊びの思いだし体験&あそび場に求めるもの、現在の不安を意識化

第2回のねらい：Beeの市内外遊び調査から、外遊びの現状を知る。外遊びの機会を意識してつくっていかないと、先細りしている現状を共有。五感をつかったゲームで、五感を通して、世界を拡げていくことの意味を考える。

第3回のねらい：古賀彩子さんに、「遊び」とは何か、福岡県内のプレイパークの現状、身近にできる外遊びの場づくり、大人のできること について語っていただく。

●2013年3月 北九州市内 外遊びマップづくり



②その後の地域での拡がり

霧丘のあそび「そとあそびのあそび」

- ・2002年～ 2つの室内型フリースペースのうち1つを2009年H21年～月1回 外遊び型に。
(Bee外遊び講座の受講者とともに地元の地域である霧丘校区で。当初は荷物を公園にはこびこんでタイヘン！)
- ・2010年 小倉北区コミュニティ支援課に働きかけ、公園愛護会の倉庫を1つ貸していただく。
- ・10～12年 小倉北区コミュニティ支援課との協働
- ・2012年 小倉北区役所コミュニティ支援課の「プレーワーカー入門講座」受託をきっかけに、外遊び環境を豊かにしたい有志10名で「KISH（霧丘いっしょに外遊びを拡げよう実行委員会）」結成。乳幼児向け外遊びがより幅広い対象へ。月1回 きりがおかプレイパーク開催中。

③外遊びが子育て支援の中で重要な理由！！

ママたちの様子&変容

- A. 外遊びが「難しい」と感じていて、外にでてこない
- B. 外遊びの場には来るが、子どもや、子どもの遊びをみていないで親同志で情報交換
- C. 子どもの遊びをみているが、遊びに対して思い込みが多かったり、禁止・先回りが多い
- D. 遊びとはなにかを理解していて、自分も遊びたいときは遊ぶ&子どもの遊びを待つ
- E. 子どもの遊びの重要性を感じていて、場のしかけをしたり、子どもと環境、子どもと他の子ども・大人との関係を育むような場づくりに関心がある

最初、ママたちは…

- ・小さい子どもは遊具でしか遊べないと思っている
- ・赤ちゃんは外ではあまり遊べないと思っている
- ・子ども親も友だちを求めているが出会えない。

人がいないので室内型の広場に行く？ 外では、大人同士、話せないと思っている。

でも、外遊びを体験していくと、変わっていきます。そして、子どもの遊びを「面白い」と感じたり、待てるようになります。

親自身ももっと、子どもがいきいきと遊ぶ姿にふれることが必要！！

▼課題

北九州市内の赤ちゃんは年間8000人生まれます。でも、外遊び講座の受講者は少数…。

子どもの遊びの応援団を増やしたい！ でも、まにあうかな？

子ども手当以後、たくさんの乳幼児向け「教室」が増えています…。



屋外型子育て拠点

屋外型遊び場づくりの重要性を感じました。

「日常」ではなく、イベント感覚で遊びを捉えている親が多いと感じています。それは育児書・行政の語る「子育てとは」の影響力が大きいと思う。だからこそ、今、「室内」じゃなく「屋外」の子育て支援をしっかりと出していきたい！

まさにこれから取り組みたいと思っていた「屋外型子育てサロン」もって横山先生のお話をうかがいたかった。

プレイパークの大切さがよくわかりました。屋外型子育てサロンのコーディネートが大切ですなー。

やっぱりあそぶことって大事ななあど改めて実感。自分がどうやって動きかけることであそびの大事さを伝えていけるか考えたい。プレイパークと子育て支援拠点を連携させていくにはどうすればいいか、リーダーとしてできることを知れたらよかった。

室内型サロンづくりに力をそそいだ児童館職員時代・・・をちょっと反省。「もっと外遊び」をすすめていこうと思いました。

実体験からのお話で外遊びの大切さをとても納得できました。室内での遊びがあふれているとの気づきがありました。

行政として取り組む

具体的な取り組みと実際の検証されたデータ（知識）を聞くことができてよかったです。行政として取り組むうえで様々なデータを得ることが大事だと思います。

具体的な数字で現状がみえたのが良かった。

各地でいろいろな取り組みをされていて、いろいろな話が聴けて良かったです。こんな冒険あそび場があるのが良かったです。それぞれの役割を考えたいと思います。

遊びの大切さを実践からも研究からも知ることができ、良かったです。

公園で水道を使いたいけど、行政が栓を抜いていて自由に水が使えないのは何か方法がありますか？

遊びとは？

横山先生のお話、真髓をついていてわかりやすかったです。ルール遊び=遊びの世代と「遊び」をの内容をいかに拡げていくか、課題ですね。

具体例は聞けなかったが、外遊びの大切さや、遊びの定義や効用等々聞けて今の（主催している）遊び場に生かしていかれたらと思いました。

やはり外遊びは大切と改めて思いました。

どう伝える？

外遊びの重要性はよくわかりました。他の方へどうやって伝えていけるかが知りたかったです。体験してみてもなかなかよすがが伝わらない親が増えていると思います。親への気持ちの寄り添い方がわかりません。

外遊び講座をして、まずは外遊びの大切さを知ってもらいたいな、と思いました。

体験的に判断することがむづかしい親世代に外遊びの重要なことを伝え、感じてもらうことをしっかり考えていきたいです。

保護者の方に具体的に外遊びの良さを伝えることが私の役目だと思いました。私たちの伝え方の重要性を強く感じました。

遊びの大切さ、遊びとは何かをプレイパークのメンバーを再認識し、仲間をふやすためにネットワークを広げるべき、積極的に他団体に声かけていきたいと思いました。

初めて知った・元気になった！

まだまだ勉強中ですが本当に何もわからないことが多かったのですが、資料や話し合いなどでいい勉強になりました。

冒険遊び場のことを初めて知りました。すごく新鮮です。

森山さんのお話をきいて元気ができました。岡山にも多くの森山さんのようなお母さんといっしょに遊び場をつくらしていきたいな、と思いました。

のあのあの活動からやあやあ、そしてプレイパークに発展、すばらしいと思いました。横山先生にはエールをいただきました。

もう少し話をみなさんとしたかったな。

屋外型子育てサロンの コーディネーターになるぞ！

感想の中に「日常」ではなく、イベント感覚で遊びを捉えている親が多いと感じています。それは育児書・行政の語る「子育てとは」の影響力が大きい」との意見もありました。室内型遊び場が増えてしまった危機感を共有して、「お外で子育て！」を呼びかけていこう！という熱気を感じました。

実践と研究に
ふれられた

横山先生のお話

外遊びの重要性はわ
かったけど…

遊びの真髓

研究に裏打ちされた遊びの本質的な話を、じっくりうかがって、こうした知見もベースとして、安定して伝えていかなければ・・・との思いがわいてきました。

どう伝えていくか

「体験的に判断することがむづかしい親世代に外遊びの重要なことを伝え、感じてもらうことをしっかり考えていきたいです」「体験してみてもなかなかよさが伝わらない親が増えていると思います。親への気持ちの寄り添い方がわかりません。」など、悩みの解決までには至らなかったです。「外遊び講座をして、まずは外遊びの大切さを知ってもらいたいな」という具体的な声もありました。

いまあの時の分科会を振り返って思うこと

子育ての最初の時期は、親になっていく最初の時期でもあります。子育てへの不安と期待と、そして「気負い」のなかで、いかに子ども自身の姿を観つめ、子どもの遊ぶ姿からなにかを感じ取るか……。あふれるような情報よりも、まずは、子育て仲間や遊び場との出会いがあったら・・・と願います。「無心に遊ぶ子どもと共に居る」という体験があって、はじめて「遊びとはなにか」と意識していくのでしょうか。

分科会では、もっと各地の参加者の実践もうかがいたかったし、遊びの大切さをどう伝えていくか、という一步ふみこんだ課題解決の時間もほしかったです。「あと30分あれば…」との思いは、メリングリストでの交流や次の全国集会につないでいくとしても…。

全国各地ですすんでいる「子ども・子育て会議」でも、そもそも、大人の「子ども観」や「遊び観」が問われていることを、発信していきたい！そして、イキイキした遊び場が、子どもや、大人、様々な人を受けとめ、つなぐ場になることを信じて、じっくりとあきらめずに、進んでいこう！と、静かに&熱く思いました。

さあ、はじめよう！ 住民組織のつくり方

地域住民が主体的に活動しながら地域や行政を動かしてきた。子育て講座からスタートした親が学びと体験を重ねて主体的に活動するようになった。福岡における各団体の取り組みの紹介を通じて、住民組織のつくり方や運営方法、そして冒険遊び場づくり活動の多種多様を語り合しましょう。

【コーディネーター】相戸晴子（NPO 法人子育て市民活動サポート will）

【リレートーク登壇者】

佐伯美保（NPO法人プレーパークふくつ・ふくつ子どもステーション"すてつぷ"）木ノ原元美（元飯塚市穎田公民館、NPO 法人子育て市民活動サポート Will）藤原浩美（子ども支援ネットワーク With Wind）濱田美穂（たがわ子育て支援コミュニティたがわんわ）秋葉祐三子（ひびき親子あそび研究会）大谷佳那（冒険おかがき）村田泉美（K I S H・霧丘いっしょに外遊びを広げよう実行委員会）

福岡周辺のプレーパークの組織づくり

■木ノ原元美さんからの話題（穎田公民館におけるプレーパークのとりくみ）

1. 飯塚市穎田公民館の概要 福岡都市圏、人口約 13 万 3 千人

2. プレーパークのはじまり

平成 18 年（2006 年）子育て応援 BOOK「はじめのいっぽ」vol.2

～福岡発！地域でつくる子どもの遊び場&プレーパーク編～

3. 運営の変遷

一公民館職員として担当事業を連携させることで、関わる人が増えていった

小学生対象—公民館職員、子どもマナビ塾コーディネーター（小学生の親）、

児童クラブ（学童保育）指導員、わくわくチャレンジ隊の子ども達

乳幼児対象—公民館職員、かいた子育てサポートジャム（子育てサークルから支援者として活動するようになった親のグループ）

子育て支援センター、子ジャム

4. 学び、体験することから主体的な実践者へ

① Tさん、Aさん

・平成 18 年度から子育て講座に参加（A さんは 20 年度から）。平成 19 年度、T さんが乳幼児の子育てサークル「いちごクラブ」を立ち上げ、代表に。その後 A さんが代表を引き継ぐ。子どもが幼稚園にあがったのを機に平成 21 年度、Will 主催「子どものための遊び場運営セミナー」および「穎田公民館子育てサポーター講座」を受講。平成 22 年度「かいた子育てサポートジャム」を結成し、公民館と連携して乳幼児プレーパークを運営。平成 23 年度子どもマナビ塾コーディネーターとなり、小学生プレーパークを運営。平成 25 年度「かいた子育てサポートジャム」が飯塚市より「穎田子育て支援センター」の運営委託を受け、支援センター行事として公民館と連携し、プレーパークを運営。今年度、小中学生になったジャムのスタッフの子どもたちに保育講座を実施し、「子ジャム（子どもサポーター）」として子育て支援センターやプレーパークに関わる機会を設けるほか、小学生の有志を募り「わくわくチャレンジ隊」を結成、小学生の主体的な活動を支える。

② Oさん

・平成 20 年度、当時 2 年生だった子どもが通っている「子どもマナビ塾」のコーディネーターになり、プレーパークに関わる。平成 21 年度、Will 主催「子どものための遊び場運営セミナー」および「穎田公民館子育てサポーター講座」を受講。平成 22 年度「かいた子育てサポートジャム」を結成し、公民館と連携して乳幼児プレーパークを運営。平成 23 年度には穎田公民館臨時職員、25 年度からは地域活動指導員として、行政側から子どもの活動の場作りに取り組む。

5. 公民館の役割

つどい、まなび、むすぶ

地域住民の主体的な活動を育むための社会教育の場

対等な形での協働、連携



■藤原浩美さんからの話題（宗像プレーパーク）

子ども支援ネットワーク
With Wind ういず ういんど
 「宗像市子どもプレーパーク事業」
 &
 むなかたプレーパーク
 藤原 浩美

そこで出会った一つのプログラム
 虐待防止、愛着形成を目的としている
 IPPO（いっぽ）プログラム
 生後2～4ヶ月の赤ちゃんとママが
 12組までのグループで参加

何があったら
 自信をもって、
 子育てできるんだろう？
 自己肯定感を育み
 自分の感覚を磨けて
 体力、気力も育めるもの

冒険遊び場・プレーパークって
 いうのがあったって・・・
 やるなら、今でしょう！！
 2007年12月
 4人の母親がそう思った

宗像市市民参画協働条例
 2009年～2011年
 人づくりまちづくり助成金事業 採択
 ↓
 2013年～
 宗像市協働化提案制度 採択

祝
 2013年7月13日
 宗像市子ども部子ども育成課
 子どもプレーパーク事業化
 子どもプレーパーク誕生

■秋葉さんからの話題（ひびき親子あそび研究会）

ひびきの親子あそび研究会
 親子の出会いとあそびの会
 子ども会のない空白地帯に
 プレ子ども会を生み出す試み
 あそけんの 挑戦
 ひびきの親子あそび研究会
 ASO-ken since 2008
 Kids Powered Adventure

あそけんのやくそく
 おとなも子どももまもりませう

- ちいさいこには
やさしくします。
- じぶんのできることを
(みんなのために)
さがしてします。
- あいさつをします。
「おはよう」「ありがとう」「ごめ
んなさい」「おねがいします」

おきやくさんは いません。
 できる人ができることをして、
 みんなで楽しむ集まりです。
 スタッフは可能な限り、安全確
 保と準備に努めますが、基本
 は参加者が自らの安全確保を
 お願いします。
 喧嘩ももめ事も大いに楽しんで
 ください。

このゆびとまれ！式

When
 one door closes,
 other opens.
 But we often look so regretfully upon the closed door.
 That we don't see the one
which has opened for us
 by Graham Bell
 活動の中こそ 次の出会いとヒントがある。
 活動そのもの、子どもたちそのものに
 未来を呼び込む力がある

うごき、きづき、うごく と？

Learning by doing!
 あそびはまなび Learning throughout life
 生まれる前から
 生まれたらすぐ
 そして 一生涯
 ポイントは、「ちよつと負荷をかける」！！(^^)



■村田泉美さんからの話題（KISH（霧丘一緒に外遊びを拡げよう実行委員会））

1. 霧丘プレイパーク 運営団体 KISH 2011 年 12 月発足、月 1 回のプレイパーク活動

2. 霧丘は子育て支援に積極的な地域

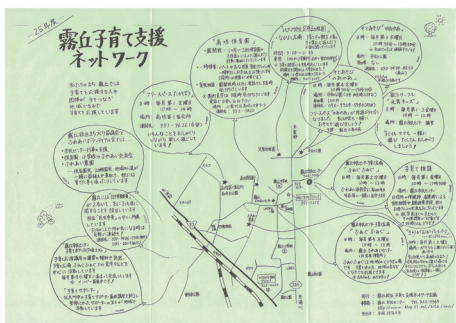
- ・ 2004 年、生活支援課の呼びかけからスタート。
- ・ 子育て中の親が孤立しないよう地域全体で子育てを応援することが目的
- ・ 2 ヶ月に 1 回会議をもつ。校区内の子育て情報がシェアでき、協力関係が出来ている。
- ・ 子育て支援ネットワーク構成団体：霧丘校区まちづくり協議会会長・同ボランティア部長・霧丘市民センター館長・同職員・足原幼稚園・高坊保育園・民生委員主任児童委員・霧丘市民センター子育て支援ボランティアグループ「ミストの会」・子育てサポーター・フリースペース高坊・霧丘ののの・元気キッズ・生活支援課保健師・同看護師

3. 活動の変遷

霧丘校区外遊びの動き

子育てグループから地域、センター活動との連携など、地域をあげて外遊びの機運が徐々に高まってきている。

- 2009 年 4 月 「外遊びのののの」対象：乳幼児親子、小倉北区平和公園、毎月第 2 金曜日
 （「霧丘のののの」から派生 2001 年～市民センターの和室でのフリースペース活動）
 「親子の居場所が増えたのはいいことだけど、公園や空き地で遊んでいる親子って見かけないね」
- 2009 年 6 月 「プレイリーダー研修」霧丘のののの主催。
 12 月 「おひさまとかぜ」中村雄美子さん「ロープワーク講座」折居弘滋さん、木の遊具購入。
- 2010 年 1 月 「子どもの遊びあふれるまちを」霧丘のののの主催。
 講師：折居弘滋さん（PLAY FUKUOKA 副代表）ひまわり基金助成
- 4 月 福津プレイパーク見学。まちづくり協議会会長、小倉北区長などをお誘いする。
 外遊びゆあゆあ誕生
- 8 月 全国一斉プレイパーク参加。Bee と霧丘のののの主催。小学生も参加。主任児童委員の方や地域の方に声掛け
- 2011 年 3 月 子育てにやさしいまちづくり推進事業「外であそぼうよ」霧丘市民センター主催、霧丘のののの協力。
 講師：佐伯美保さん（福津わくわくプレイパーク）Bee よりロープ借用、
 西川さんにロープのブランコを作ってもらい大好評。ボランティアの大人がはまる。
- 9 月 子育てにやさしいまちづくり推進事業「教えてロープワーク（ロープワーク講座）」
 霧丘子育て支援ネットワーク・霧丘のののの主催。講師：西川真。パパの参加有。
 ロープ購入みんなの子育て・親子支援事業補助金
- 11 月 子育てにやさしいまちづくり推進事業「外遊び講座」霧丘市民センター主催。霧丘のののの協力
- 12 月 全国一斉プレイパーク参加 霧丘のののの主催。
 KISH 立ち上げ第 1 回実行委員会。
 メンバー：まちづくり協議会会長・霧丘市民センター館長・同職員・霧丘小学校 PTA 会長・子ども会育成協議会会長・民生委員主任児童委員・霧丘市民センター子育て支援ボランティア「ミストの会」代表・霧丘のののの・子育て中の親
- 2012 年 1 月 KISH 実行委員会
 「プレイワーカー入門講座」小倉北区役所コミュニティ支援課主催。KISH 運営。
 ①古賀綾子さん（PLAY ふくおか代表）報告者：プレイパークの活動者（福津市の高齢のプレイワーカー・福岡市 学生プレイワーカー）
 ②嶋村仁志さん（TOKYO PLAY 代表）
 ③山下智也さん（西日本短期大学特任助教・きんしゃいぎゃんぱす）
- 3 月～ 地域をあげての開催をめざし、平和公園ではなく、小学校区内の公園での開催を模索。
- 11 月、12 月、2 月 「外遊びを通じた地域づくり「プレイワーカー養成講座」小倉北区役所コミュニティ支援課主催。KISH 運営。
 ①花田佐恵子さん（元気悠々の里）大 17、子 22、計 39
 ②折居弘滋さん（PLAY ふくおか副代表）大 29、子 34、計 63
 ③ 2013 年 2 月 2 日（土）：木ノ原元美さん（頼田公民館スタッフ）大 18、子 27、計 45
 ・小倉北区山田緑地「みちくさ」・宗像プレイパーク見学
- 2013 年 2 月～ 3 月 4 回のビデオ作成ミーティング
 3 月 「プレイパークカフェ」ビデオ鑑賞とワークショップ

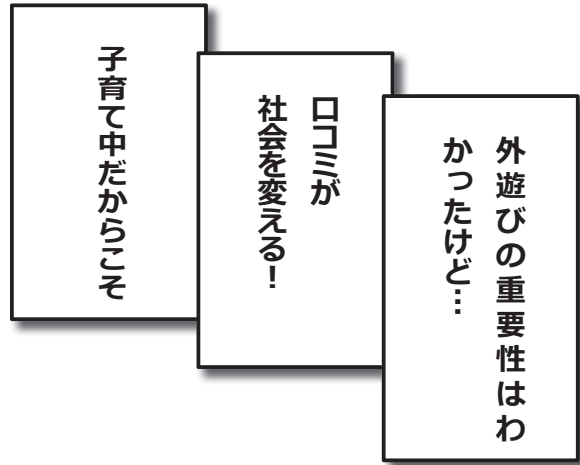


分科会の成果

**「思い」が住民主体の実践を生み出し→
つながりが実践の核をつくり→
地域支援ネットワークや制度が持続可能な実践をつくっていた。**

どの発表も、子育てをしている親やその親が支援者となって活動している実践であり、「(私たち親子にとってこんな遊び場が) あつたらいいな～」という思いが、行政や他人に作ってもらうのを待つのではなく、「自分たちで(できることから) やってみよう！」と動き出したことが実践のスタートであったことが報告されていた。ではその実践を創り出した「思い」は、どこからどのように生まれていたのか？それは、思いっきり親子で外遊びをして、その実践の意義をしっかりと体感したからこそその思いだったようだ。

思いをもった人も1人では何もできない。多くの仲間や支援者を増やし組織化していったのは、「口コミが社会を変える！」という実感から、一人一人と丁寧につながっていくことから始まっていた。時間はかかるがそのつながり方、そして話し合い—どのような遊び場をつくるか？どのように活動をしていくか？など—のプロセスが、実践を生み出す住民組織の核になっていた！

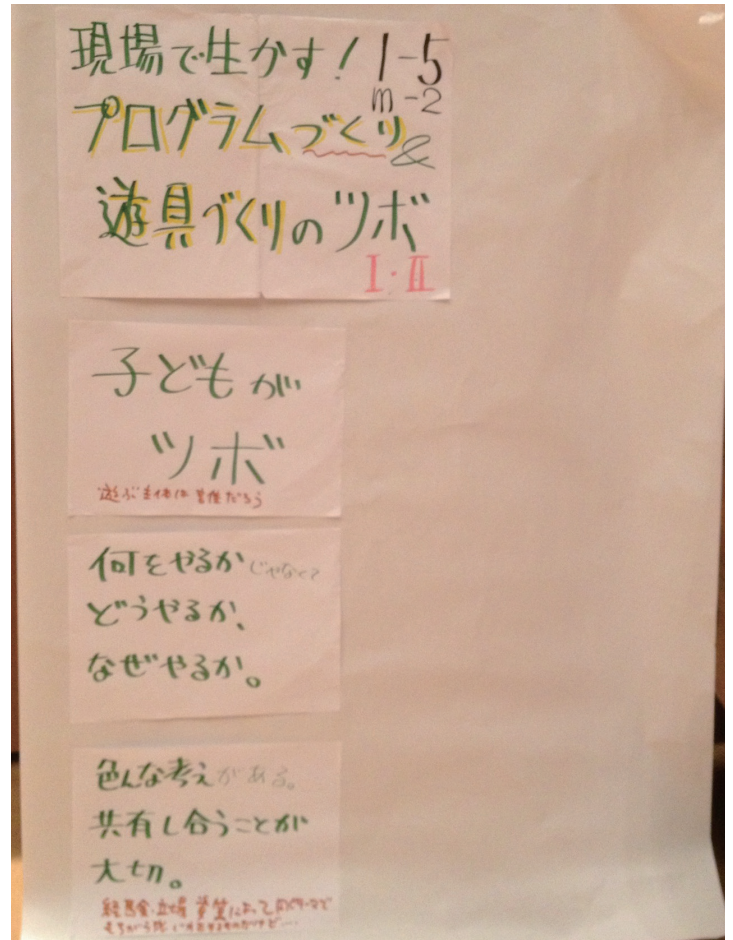
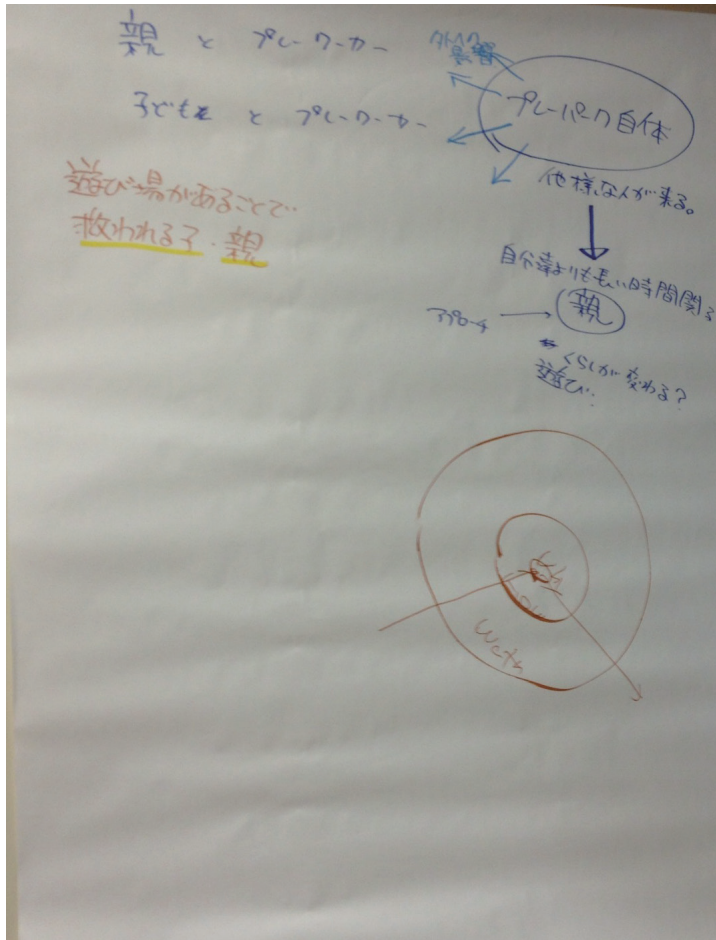


住民組織ができると、その実践を確固たるものとするために、多くの事例で、さらに関係諸機関や関係団体との地域支援ネットワークを充実させていた。また、制度や施策に位置づけるために、「条例」をつくることも有効な方法であると紹介された。

いまあの時の分科会を振り返って思うこと

一つの分科会で7つの実践発表というのは贅沢すぎる企画であった。いくつかを丁寧に深めていく方法もあったが、分科会の世話人と話し合いをして「せっかくの福岡集会なので、福岡で行われている住民が主体的に関わっている遊び場実践を、全国のみなさんいできるだけ紹介していく場にしよう！」という主旨からこのような形で行っていった。

とにかく、7実践×10分間の発表は、発表者の「熱い思い」に酔いしれ、圧倒され、参加者たちの多くが、私たちも「できることからはじめよう！」というエネルギーをもらったことだろう。また、その発表された7団体がそれぞれつながっていて、県内各地で交流し、支え合いながら、遊び場実践を充実させてきていることが再確認されたことから、終了後、「福岡プレバ協議会」が発足された。分科会が契機になって、福岡の遊び場ネットワークができ、最高の成果が生まれたと思う。



遊びこむためのきっかけづくりにリーダーがまずあそぶ（大人が面白がるって大切だと思った。）準備ありがとうございました。／●親との価値観を一緒にする。

遊び場づくりの根底にあるのは子どもと遊びたいというところがあるのでづくりがたくさんあっていろいろな価値観が共有できれば楽しいことが出来ると思います。／①子どもたちが生き生き遊んでゆたかに成長するための遊びの場づくり②そのためには親がまずホッとできる場づくり（子どもの遊びを笑いながら見ていられるような心のゆとりをもてるように）③子どもがたくさん遊んでいるいろいろなことを体験しておおきくなっていけるようなそのための関係づくり、場づくり／①安全②参加している全員のナットク③子どもが遊びをつくる（大人がつくってしまわない）←どこまで?が難しい。もっと遊具などの具体的な話が出て来るのかと思いましたが、プログラムの話題からプレーパークの在り方そのもの etc. 濃い話しになっていきました…投げ方と進行をもう少し具体的なテーマにしぼってもらっているような場所のプログラムや遊具の話がききたかった。／①遊びのネタはみんなそれぞれ出し合うと楽しい②話し込むと深くなっていくプレーパークはだれのため?③様々な価値観をもっている人たちと折り合うのは良い! / 「遊びてえ」の気持ちを共有するのがプログラムづくり、そこさえ押さえおけばいいと思いました。子どもをよくすると世界はよくなる／①楽しい→②やってみたい③やっちゃお〜!④やれちゃうんだよ〜! プログラム・遊具づくりのつぼの枠をこえた話しになってすごく楽しかった。「プレーパークは誰のために?何のためにあるの」との切り口から話してもこの話しになっていく。今回集まった人たちとその話をできてよかった! / 野下さんのまとめ「遊びてえ〜」の気持ちを共有すること。あっちこっちプレながら最初の気持ちを大切に活動することの大切さに改めて気づかせてもらいました。ありがとうございました。／プレーパークは誰のためにあるの? 私は幼い頃、近くの山で遊び、兄やその友だち、自分より年下の子たちとターザンしたり防空壕を家に見立ててお母さんごっこしたり秘密基地をつくったり枝で釣りをしたり…誰も大人なしで工夫し、自分たちが楽しめることを見つけだして遊んでました。私は自分たちの地区でプレーパークをしていても、プレーリーダーやプレーワーカーという名のもとでもなく、私にとってもそこが楽しめる場所であり、子どもたちも遊びからきっと社会に出た時に何か役に立つと思うから『遊び』は人間関係や心の成長につながっていると思う。／高学年～中高生がエネルギー出せる遊具として坂のぼり板の設置→超人気毎日しまう、毎日斜度が変わる。・中高生が呼びかけた大水風船大会午前から水風船 ●●百個?世話人はハラハラしたがやったあと片付けもちゃんとできていてすごい! と思った。子どもを信じること大切（でもその前に片付いていなくて大人が片付けたり怒ったりという時期があったからこそか?）／「星の王子さま」の本で、とっても忙しそうに時間を詰めながら働いている大人に「休みの日はどうするの?」と聞くと「湖のほとりでゆっくり座っていたいなあ」と大人が応えると、「結局は大人はゆっくりしたいんだね」と王子さまがいう場面がありました。子どもがきっかけでもいので、大人も外でゆっくりできる時間があるだけでも違うと思いました。②ハウス名作劇場に出る主人公などはほとんどみんな本当の親がいまませんが違う支えてくれる大人がいてくれて心の成長をします。伝記の人たちも本当に偉いのはこのそばで支えた人なんじゃないかと思われるひとが出てきます。親以外の自分を支えてくれた大人というものは子どものとても大きな可能性をのばすための力になる立場だと思いました。／プレーパークは集まった仲間「ありがとう!」で始まりお世話になったまわりの仲間「ありがとう!」で終わる。（来てくれた方、近所の人…その他いろいろふえた人）これがプレーパークでした。／・子どもへのプログラム・大人へのプログラムこれは別・本来子どもは勝手に遊ぶということを前提にプログラムをつくる・「プレーパークとは論」はみんなそれぞれ違うんだな〜!各現場で違うんだな〜だったらプログラムも違うよね〜って思ったよ。／子どもが生き生きとがむしゃらに自由に遊べるプレーパークづくりにおいて、討論を始めると、だんだんみんなの表情が固くなってしまっているので意外ともっと深く考えずにみんなが笑顔になればいいものが見つかる気がします。昨日の分科会ではみんなで明るい表情で遊びについて話し合っすごく楽しかった印象のまま本日は途中から参加したらすごく固い感じだったのでびっくりしました。でも全て意味があるのでありがたかったです／立場や経験、資質などの違いで面白いと思うツボも違う おもしろがり方がそれぞれ。／・関係する機会（会う機会）・コミュニケーションの機会（意思表示する機会）・つくる機会（一緒につくる機会）／鹿児島にはプレイパークがないので（多分…）今回プレイパークの存在、プレイリーダーの存在を知れて、また様々な思い、熱意、取り組みを聞くことができ、とても面白く楽しい時間を過ごすことができました。ただそこに遊び場があるだけでそこに来てくれる方々の人生、行き方、考え方も動かされていると思います。プレイリーダーの遊ぶ様子・発送・感覚を保護者の方々も一緒に過ごし、話しをしたりするだけで忘れていた、眠っていた遊び心が目覚めることもあると思います。ツボはしばれませんが。

分科会の成果

遊ぶ主体は誰だろう？

遊びの主人公は子ども。
大人ではない。

子どもがツボ

どうやるか、
なぜやるか。

色んな考えがある、
共有し合うことが大切

何をやるかではなく。

大人はつい「プログラム」をやりたくなる。
でもそれは「遊び」？
想像力をかきたて、創造性を喚起し、自由を
どうやるか、なぜやるか。が

経験、立場、資質によって、同じテーマでも違う感じ方
をするものです。

手持ちのネタを増やしたい。16名の参加者の『流行の遊び』を持ち寄ると、+15の引き出しが増えた。
16とおりの違いがあることがわかった。

↓
お互いを知ること、みんなで共有することはだいじ。

プログラムのツボではなくプログラムづくりのツボを押さえることが「手持ちのネタ」を枯渇させないツボなのでは？

冒険遊び場≠火が使えなくちゃいけない・ロープ遊具があれば遊び場・遊ぼうパン・ベーゴマ…おきまりのメニューをすることで

ではなんのためにそんな大変なことをしているの？

子どもがいきいきと遊ぶことをささえるために
しかける側が気をつけるべきポイントは

・用意すぎない・提供しちやいけない
↓
その頃合いは？というところが悩ましい
||
遊びが生まれる空気をつくる

自分だけでやらない=子ども（大人・他人）を信頼する=子どもがツボ

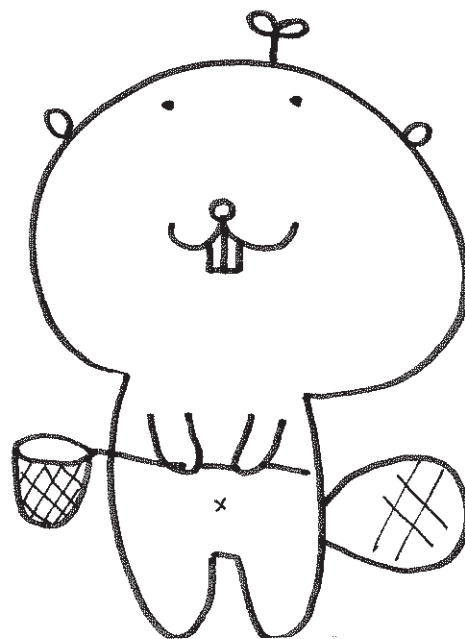
一つの答えがあるわけではなくいろんなやり方・プレーパークがあっていい。

現場の設え方～配置・動線・遊具づくり～ I・II

子どもが「やってみたい!」と思い、動きだしたくなるような遊び場。自ら育ちたい、もっともっとやりたいという意欲を引き出す「遊育する環境」とはどういうものだろう。

実際に現地に立ち、遊び場をデザインする。そこからさまざまな要素を考えます。

【担当】天野秀昭(日本冒険遊び場づくり協会) 【講師】折居弘滋(PLAY FUKUOKA)



「遊ぶ」原点を見つめる～震災復興支援の事例から～

「食う・寝る・遊ぶ」というように、「遊ぶ」は生きていくために不可欠なもの。子どもたちにとって、思い切り「遊ぶ」ことは自らを癒していく力。震災後に東北では、多くの遊び場づくりがはじまりました。震災復興支援の中で見えてきた、「遊ぶ」の原点を見つめます。

【担当】須永力【講師】神林俊一、渡部達也

須永力

日本冒険遊び場づくり
協会理事・震災復興支
援担当

次代、次代って、勝手に子どもに背負わせないで。ほっといても子どもが「次代担いて〜!」と思う現代にするのが大人の役目。今も多くの人が苦しむ東北の、当事者の努力で僅かに見えた明るい知らせばかりの報道。もう大丈夫という誤解を生み、明日は我が身の自然災害と原発事故は矮小化。大人の言うことを聞く「いい子」より、平気で逆らう「悪い子」であれ。

神林俊一

気仙沼あそびーばー

九州で一番感じたのは東北との距離。被災地の話を色んな方としたが、まるで外国の話をしているかのよう。一方で遠くから頑張って応援しようという人達もいる。でも、ちょっと前も今も一緒に、すごい事を一杯しなくても良い。東北はまだまだ日常を取り戻してない。細く長く寄り添って欲しい。すごい事してスッキリして忘れちゃうより、ずっとそれが良い。

渡部達也

NPO 法人ゆめ・まち・
ねっと

何気ない日常を失った子どもたち。そこに遊び場という日常を提供し続ける三人の奮闘と葛藤。どこにもいる生きづらさを抱えた子どもたちに向き合うための確かな示唆があった。

高橋慶

南相馬みんな共和国

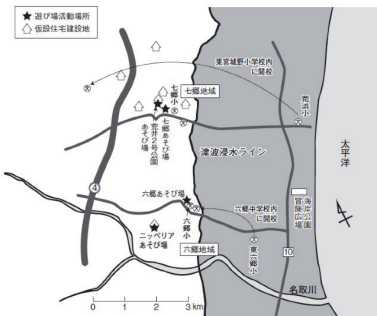
思い出すのはやっぱり「あつい」。空調がほとんど無い館内は暑かった。それ以上にあの場に居た大人達は熱いハートの持ち主だった。社会全体から見たら子供の遊び場なんて小さな一部分に過ぎない。でも、その小さな一部分が人間の一生において、大きな一部分になる事を知る人達が日本中に居た。未来の地球はこんな人達が救って行くのだと確信した二日間だった。

■ 気仙沼あそびばーでの活動 ■ 神林俊一からの話題



プレーカーによる冒険遊び場づくり「最初の一步」の活動事例

■ 冒険あそび場せんだい・みやぎネットワーク



1、震災当時のときのこと。

2012.3.11.pm2:46 東日本大震災発生。長男（当時6歳）は保育所でお昼寝中。長女（当時4歳）と次男（当時8か月）は家でお昼寝中でした。大きな北上川と小さな皿貝川に挟まれたところに家があり、家の前も堀だったので、いつも津波警報がなると数10cmの予報でも逃げていました。3.11 ももちろん逃げ全員助かりました。

地震と津波がくるあいだに会った友だちがいました。子育てサークル cocoma の代表を務めていた A さんが、子どもを抱っこしていました。私は彼女に「避難しなさいよ」と言ってあげられたらよかったのですが、彼女は家のある海の方へ帰ってしまいました。それで津波に流されてしまいました。私は津波がくることを予感していたのに、彼女に「気をつけて帰ってね」と言ってしまいました。A さんの上の子が震災二日前の津波警報で怖がっていたから、「帰ってあげたいの」と、彼女は言っていました。それに対し私は「気をつけて帰ってね」と言ってしまいました。私は自分の勘（かん）で津波から逃げられましたが、友だちを助けられませんでした。子どもを思う母親の気持ちは、とてもよく分かりますが、避難するように言わなかった自分を今でも責めています。

2、震災による経験を通して思うこと。自分、家族、人間、地域、自然、原発…。

震災後まもなく、実際にもテレビ等でも津波被害を見ていない祖母から「よかったね」と言われました。戦争も宮城県沖地震の記憶もない、私がこうした自然災害によって避難生活を余儀なくされ今までの生活がいかに贅沢だったかということを知る機会になったのを、そう言ってくれたのです。

私も半年くらいたって落ち着いた生活が出来る頃になり、ようやくそう思えるようになりました。今まで地中深くに潜んでいた植物が津波によって洗い出され、津波後に開花した花があります。そんな花のように震災を期に開花した感情や価値観があります。

子どもたちに自然のなかでの体験をさせて、自然に親しませておきたいと思っています。それは自然の津波で、大変なことがおきたとしてもです。自然環境は豊かな恵みももたらすけれど、天気や環境が一変し災いをもたらすこともあります。そんな自然に対応できるのは、自然の中で幼いころから身体で覚えた感覚ではないかと思えます。

震災はいつどこで起きるか分からない。いつでも自分（子ども自身）で判断できる勇気と覚悟をもつように伝えていきます。親や兄弟はそれぞれ避難していると信じ、まず自分の身の確保、「津波でんでんこ」の精神を教えるようになりました。

3、震災という過酷な事態のなかで、親と子をむすぶもの。

家族はできるだけ一緒にいなければと強く思います。震災後はいつまた余震が来て津波が来るか分からない状態でした。本当に津波が来ないとしても、どのお母さんも「またくるかもしれない」という危機感が強かったです。その中で母と子を結ぶものは「いつも一緒にいる」ということでした。

保育所や小学校に通っている子の親は、何かあったら（余震や津波）すぐに迎えにいけるようにといつでも家にいてスタンバイしていました。ここ北上町では買い物や病院に行くのに車で片道40分かかります。震災前は半日がかりで行っていましたが、震災後は、用事を済ますとすぐに帰ってきて、子どもの帰りを待っています。

4、震災とその後をとおして、子どもたちへ、人々へ、これからの日本へ、語り継ぎたいと思うこと。

日本は地震だけでなく、異常気象で河川が氾濫したり、台風や竜巻、火山、いつどんな災害が起こるかわかりません。自分の住んでいる地域がどんな土地にあるのか、何か起きたらどこへ避難すればいいのか、子どもはその時どうしたらいいのか、連絡手段はどうするのか、家族の皆さんで日ごろから話し合い、次の災害へ備えて欲しいと思います。避難するのに持って行った方がいい物、家に備えていた方がいい物、いろいろ考えられると思いますが、日ごろからの心構えに勝るものはありません。いつどこでどんな状況で災害に遭遇するか分かりません。これさえあれば大丈夫という物はありません。震災に対する心構えを持つことが一番重要だと思います。

5、プレーパークをするようになったきっかけ。

震災前から子育てサークル cocoma の活動に携わっていました。2008年立上げから2年間代表を務め、その後代替わりし落ち着いてきたところに震災が起り、当時の代表、副代表、メンバーの3割近くの親子が津波の犠牲になりました。そんな様子をただ黙ってみていられず2011年6月から cocoma を再開しました。子どもたちに遊び場が必要なようにママたちにもおしゃべりの場が必要でした。震災後は NTT の基地局も流され数ヶ月固定電話が使えず、携帯電話もつながる場所が限られていましたので、サークルの再開はママたちのおしゃべりの場として喜ばれました。

震災から1年以上たって日本冒険遊び場づくり協会被災地支援事業の「あそぼっカー」のことを知りました。最初は子育てサークル cocoma であそぼっカーに来てもらいましたが、サークルが未就園児中心のものであったので、別団体をつくりました。もうボランティアに頼るとかそういう時期じゃないよね。自分たちでやりたいね。地域の人たちでやれたらいいね。ということもあり、2012年6月から「北上プレーパーク有志の会」が主催でプレーパークを行うことになりました。

同じころ石巻市教育委員会の勉強会に参加させていただく機会があり、そこに現北上小学校の教諭が参加されていて、ぜひ小学校の裏山でやりたいですね、という話しになり、当初行っていた「にっこりサンパーク」という仮設住宅が建ち並ぶ公園から、北上小学校の裏山に場所を変えて行くようになりました。そんな過程から、北上小学校裏山で「うらやまでプレーパーク」を私たち親が有志を募り行っています。裏山は津波避難場所になっています。でも何かに使っていないと、いざというときに子どもたちが上がれないから、遊び場として使っています。本来なら震災がなくても、こういう遊び場があってもいいはずで、しかもこういう自然がいっぱいあるところでは、どこでも遊べるはずなのに、遊び場を作らないと遊べないというのも変ですね。子どもが自由に遊べる、子どもが大人の都合によらずに遊べる、子どもが主体の遊びはどこへいったのか。子ども社会は大人の都合でつくる社会じゃない。もっと自由に、もっと生き生きと、そんな遊びをさせてあげたいと思います。

分科会の成果

自由な遊びが（本来遊びは自由なものです）子どもを元気にするのではなく、子どもがもともと持っている力が自由な遊びを通して発揮されるのです。だから子どもには、自由な遊びが大切なんです。もともと持っている力を発揮できるからこそ、自分の力を知り、人の力を知り、関わり合いの力を知ることができるのです。そしてその子が持っている力を発揮するから、大人は子どもを知ることができ、その子が置かれている状況や子どもが置かれている環境を考えることができます。そして、力を発揮することができない状況の子どもに気づくこともできます。

遊び場づくりはとても入りやすい市民活動だと思います。なぜなら大人は100パーセント、「子ども経験者」だからです。そして、遊び方に違いはあっても、全員が「子どもの遊び経験者」だからです。遊びに関して大人はみんなとっくの昔にスタートを切っています。専門家も研究者も必要ありません。自分が子どもの頃、どんな遊びが楽しかったか、どんな遊びがしたかったか、振り返って思い出して、そしてたかが子どもの遊びと割り切って、大人の都合、事情、主義主張はとりあえず横に置いて、子どもが楽しいことを考えて集まることができる柔軟な活動だと思います。

遊びの力 遊びは
子どもの元気の源

市民の力 市民が子
どもの元気をつくる

でも元に戻す復旧で
いいの？
前よりももっと良く！

震災からの復旧は「元の生活に戻す」がキーワードの一つです。でも、被災地のある少年はつぶやきました。「震災が起こってよかったなあ」。自分たちのことを鼻つまみ者扱いしていた大人たちが自分たちに目を向ける余裕を失ったからです。あれから2年半、少年はつぶやきました。「最近、なんかまた嫌な感じなんだよね」。暮らしが徐々に日常化すると大人たちはまた、子ども・若者の弱点・苦手・短所を指摘し、改善を求め始めました。ある被災地では3年目を迎え、若者の自死が続いていると報告がありました。この状況は被災地に限りません。全国各地で生きづらさを抱える子どもたち。前よりももっと良い社会を築く。遊び場づくりをする大人は、子どもに関わる大人は、そんな姿を子どもたちに見せたい。

冒険遊び場づくりの行政での位置づけと関わり方 (プレーパーク/プレイパーク)

「遊ぶ」は、人としてとても大切なこと。「行政」が「遊ぶ」を支える意義は何か？ 私たちは「行政」に何を期待するのでしょうか？ 行政任せにすることではありません。先行する事例を紐解きながら、『行政がそして市民が担う「遊ぶ」』を考えていきましょう。

【担当】 藤原浩美 【講師】 佐伯美保、菅博嗣、関戸まゆみ

菅博嗣

日本冒険遊び場づくり
協会理事・あいランド
スケープ研究所

冷房が恋しくなる日でした。NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会が、全国の冒険遊び場づくり活動での行政と市民との連携工夫の要点を紹介しました。そして福岡県の宗像市と福津市から行政と市民の協働による活動の経緯と魅力という話題を提供しました。後半は、4つのテーブル毎に意見交換をして、とても熱い分科会となりました。

話題提供「行政と市民が『遊ぶ』を支えるということ（先行事例と全国への広がり）」

■ 関戸さんからの話題（全国の活動事例を踏まえて）

- ・我が子が気に入り私もそこにいと楽しなので通い始めて以来30年冒険遊び場づくり活動をしている。
- ・羽根木は、当初から行政の事業となっていたが、住民が運営することで子どもを見守る空間ができていた。
- ・全国の例を見ると、自治体毎の特徴や性格によって冒険遊び場づくりの成り立ちには違いがある。
- ・冒険遊び場づくりは、特定の人だけのものにせず、みんなで活動していく工夫が大切になる。
- ・活動継続となる世代交代には、若い人が子育てしながら関わることのできる雰囲気づくりが大事である。
- ・行政との連携は、みんなでの活動や継続に有効です。この仕組みづくりにも協働で取り組んで欲しい。

関戸まゆみ

日本冒険遊び場づくり
協会理事・副代表

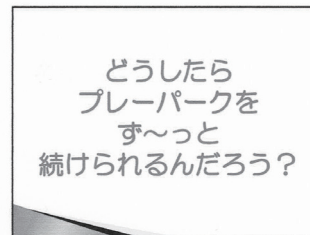
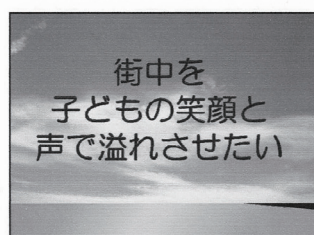
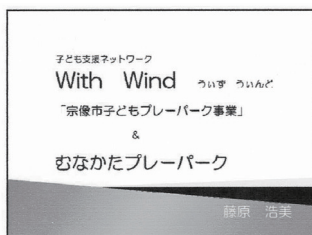
「行政と市民が『遊ぶ』を支える」事例紹介①宗像市

■ 藤原さんからの話題（むなかたプレーパーク：市民の目線から）

- ・宗像市は、一年に7~800名の子どもが生まれる人口9万人の都市。子育て支援活動は活発である。
- ・冒険遊び場づくりには子育ての力があると感じて、2007年から取り組み翌年から月に一度開催した。
- ・「市民参画協働条例」の「人づくりまちづくり助成金」を使って川崎夢パークを視察。つくりたいと思った。
- ・そして2011年にできた「子ども基本条例」に沿う企画として、市へ冒険遊び場づくりを提言した。
- ・市からは、単団体でなくネットワークをつくる提案を頂き「子ども支援ネットワーク」を立ち上げた。
- ・以来、行政と市民は苦勞と喜びを分かち合いながら活動を続け2013年4月13日にオープニングを迎えた。
- ・これからも行政と一緒に「宗像が好きだ！という子どもたち」が育まれる遊び場づくりをしていきたい。

藤原浩美

むなかたプレーパーク



藤原浩美さんのパワーポイントより抜粋

■柴田部長からの話題（『子どもの遊び』を子育て施策のテーマに）

- ・三課構成の子ども部は、直営だけでは形ならず、関係機関、市民の方々、団体、地域との協働は不可欠。
- ・子どもに接する時は、「子どもの最善の利益」を第一に考えることが本質的に重要であると考えている。
- ・「宗像市子ども基本条例」で謳う「豊かに育つ権利」の内容として「遊ぶことができる」が明記された。
- ・遊びは子どもの居場所を考える時の原点。自分自身が遊ぶ楽しさを知り他者とともに想像していく力が大事。
- ・行政を動かすことは個人的な想いだけでは難しい。行政の課題に近づけるアプローチが重要である。
- ・「市民サービス協働化提案制度」で市民が持つノウハウやアイデアを活かし市民協働の委託契約に繋げる。

柴田佑治
宗像市子ども部

「行政と市民が『遊ぶ』を支える」事例紹介②福津市

■佐伯さんからの話題（わくわくプレーパーク：市民の目線から）

- ・「冒険遊び場がやってくる」を読んで、市民と行政が協力して子どもが遊べるまちをつくることを知った。
- ・2002年、「わがまちづくり支援事業」に「子育て環境部会」を立ち上げ連続講座を開催して仲間を募った。
- ・2004年、立ち上げ予算100万円、行政職員の草刈りの支援もあり第一回を開催。活動への交付金は57万円。
- ・2009年、公園改修工事（1700万円）。2010年に常設プレーパーク開設。WAMからの単年度助成を得る。
- ・「私たちは毎週開催したい、お金をどうしたらよいでしょうか？」と行政に相談に行った。
- ・助成金制度を請けられるようにNPO法人化するアドバイスを受け、ミッションを掲げて認証を受けた。
- ・2012年から4団体が担当曜日を決めてトータルで週五日開催。養成したプレーワーカーも研究会で研鑽。

佐伯美保
わくわくプレーパーク
福津

〈わくわくプレーパーク福津活動年表〉

- 2002：わがまちづくり実行委員会発足（子育て環境部会）
- 2003：冒険遊び場をつくろう連続講座
- 2004：第一回わくわくプレーパーク
- 2006：倉庫設置（地主さんの協力）、福間小学校地域づくり計画策定会議、ふくま郷づくりの会発足（子育て支援部会）、福津市総合計画にプレーパークの整備が明記
- 2007：毎月一回開催（支援部会）
- 2008：昭和公園リニューアルで建設課、プレーパーク定例会議
- 2009：公園工事でプレーパーク休止、園内に倉庫設置、プレーワーカー養成講座、公園管理計画書を建設課・郷推進課・こども課に提出
- 2010：常設のプレーパーク開設（九州初）、維持管理課とのプレーパーク定例協議会にこども課が加わる、毎週開催（支援部会と福津市子育てネットワークの共催）
- 2011：毎週開催（支援部会+わくわくプレーパーク福津の共催）
- 2012：毎週末2回開催（支援部会+子ども課+プレーパーク福津）、市民行政共働事業企画書（わくわくプレーパーク）をこども課に提出

※佐伯美保さんの「わくわくプレーパーク」の取り組みとその成果より抜粋作成

黒田俊彦
福津市
健康福祉部
こども課

■黒田課長からの話題

- ・市は、2010年度に「こどもの国基本構想」、2013年度に「福津市総合計画」を策定し、計画に「プレーパークをつくること」を明記した。従って実現するのはプレーパークでなければならない。
- ・行政は、計画を根拠としてプレーパークを実現させるための場所と資金、そして人の確保に取り組んだ。人は佐伯さんのような方々が財産である。公園の維持管理課から公園利用への了解は得ている。財政は厳しい。
- ・行政には、民間でできることは民間にという考え方がある。計画を踏まえて行政サービス、行政が担うべきことは何かといったことを整理しながら、継続性に向けた委託、補助金、交付金などの適用を考えていく。

グループ討議で話題にしたいこと

冒険遊び場について考えたい
みんなのフレイパークへのおもい
現状とやりたいこと
フレイパークがあることでそのまちの変化は？
どうしてフレイパークと関わってほしいと思った？
フレイパークを広める！認知！

活動にあたっての課題は？
コミュニティとフレイワーカー
ありあい 経営 安全管理
リスク
危機管理について

行政としての位置づけ
実現したいけど幼・小・保がない地域
子育て計画って変更可能？

行政との協働の実現
これからもっと協働が広がるために相談に行く
どうしたら行政と一緒に（協働）出来るの？
「協働」ということ 協働について
立ち位置の方向付け

今後の展望
篠栗町でフレイパークを作りたい！
これからのこと
これからどうなっていくのか

行政との出会いのきっかけ
役場と仲良くなるには？ 行政をその気にさせるツボ
フレイパークしたくても行政からNOが来たとき、どうしたらいいかな？
行政へのアプローチの仕方、行政への具体的な動き方
行政とのつながりが悩み

市民とのつきあい方
フレイパークの団体をひとつにまとめた方が、
なかなかうまくいかないのどうしたら良いか

話題提供と事例紹介で印象に残ったこと

行政が分科会に参加した！
行政の方の参加！ ふくつも宗像も行政の方との出会い
行政の人が、「魂に火のついたことば」を語ってくれたこと

居場所になる
地域に新しい居場所として
家庭・学校・第3の場所 PlayPark
大人が育つ 実は地域の居場所
フレイパークができてあがっていく様子を知れたこと！
フレイパークでなまきいけないんです
かまどは交流の場

共有しやすくする
言語化する まめに報告する
行政の方の理解の深さ 理念が重要
フレイパークの良さを言語化して伝える

行政と繋がる
行政とのつながり
単純に宗像と福津の行政のつながりが
うらやましいと思いました
行政とのつながりがフレイパークを濃くしていく

行政と協働する
住民と行政のパートナーシップ
行政と市民の立場のちがいをうまく使うこと…
市民のパワー／行政のスタンス・理解
市民と行政の関わり方！

行政支援をつくる
行政のバックUPが必要だということ
条例による活動支援 子どもの権利
フレイパークを“計画”の中に入れていっていること
火のついた魂をどう形にするか？
場と資金を行政は提供します。

活動で大切なこと
フレイパークを作ることがゴールでなく、
その後どのように運営するのか？
常に進化し続けていること
会はずばらしマ（姿勢）
続けられる体力・気力が大切、ということ
まち全体を遊び場に。

フレイパークのここが好き

笑顔になる
笑顔 みんなの笑顔 みんなの笑顔が広がるから
子どもの笑い声があふれているところ
自然に大人も笑顔になれる

受けとめる
子ども・子育てにまつわるいろんな課題を受け止める

元気になる
地域の子どもの元気がなくなっていくこと
五感をフルに働かせるところがワクワク
大人も子どもになれる
子どもも大人も遊べるところが楽しめる

つながる
乳児からおじいちゃん、おばちゃんまで幅広い！
つながるところ 出会い！ 大人の立ち位置は？
色々な人と関わることが出来る！

やりたいことができる
どろんこになれる 体験は大切 達成感 ありのままの自分でいい
自分の責任で フレイパークは、
子どもが好きなように好きなことをやって笑顔がいっぱい
子どもたちがやりたいことをやっていること

ゆるい・自由
ダメ！と言わなくてよい所 ゆるいところ
こどもが自由 子どもが自由に創造
やれる人がやれることを自由に自分の責任において
自由・ゆったり・リラックス開放的・笑顔
外あそびであること
(子どもの主体性で) 自由にあそべる

分科会提供者からのコメント

藤原浩美

子どもが育つ環境が悪くなっている。それを整備するのは、大人の責任だと思う。行政と一緒に整備できると、行政の強みと市民の強み、お互いに良いとご取りで幸せ倍増！

冒険遊び場を自分のまちにつくることは、子どもが豊に育つまちをつくること。そんな冒険遊び場を市民が行政と協働でつくっていくそのプロセスが楽しい。

佐伯美保

関戸まゆみ

「市の事業」は社会に必要なのだというオスミツキ。変わり者の集まりでなく、認められて全国で繋がっていること。

地域につくる冒険遊び場づくりでも、いろいろな得意技が欲しくなります。企画力、行動力は、市民が得意です。信用力、継続力は行政も得意です。

菅博嗣

分科会の成果

冒険遊び場づくり
支えられた
整理されたものに

市民が
運営の主体となる

市長や担当者の異動に
左右されない継続性。
条例をつくる。

遊ぶ子どもたちを、如何に受け止めて行くか？
社会をつくる私たちがどういった知恵を出すことができるか！
行政と市民という点から語り合いました。
安定性、主体性、継続性を考える上で、
市民と行政の連携と工夫は欠くことの出来ないビタミンです。

居場所として
展開する力

イベントからの
脱却

乳幼児のうちから
遊ぶ機会

冒険遊び場づくりの魅力の認識も改めて重要な話題となりました。

「それって何？」という関心に答える言葉。

居場所、特別なことではないこと、小さいときから…。

地域社会で話すときの言葉を整理しておく、

行政との協働への工夫に役立つと思います。

「私の魂に火がつけられた」

「『心が折れるより骨が折れる方がまだ』と言う言葉が私の魂に火を付けてしまった。」宗像市の柴田子ども部長から飛び出した発言。名古屋でんぱくプレーパークの武村万知子さんは、「行政の人が『魂に火がついた』という言葉を知ったこと。」に感動しましたと発言してくれた。

<参考資料>

- ・大村瑠子ほか4名「遊びの力 遊びの環境づくり30年の歩みとこれから」明文社、2009年。
- ・日本冒険遊び場づくり協会「はじめよう！パートナーシップで冒険遊び場づくり」2004年。
- ・港区まちづくり支援部「子どものあそび場づくり20の提言」港区HP、2010年。
- ・日本冒険遊び場づくり協会「つくろう みんなのプレーパーク」、2013年。
- ・羽根木プレーパークの会「冒険遊び場がやってきた！—羽根木プレーパークの記録」晶文社、1987年。
- ・Rachel L. Carson、(訳) 上遠 恵子「センスオブワンダー」新潮社、1996年。
- ・宗像市『宗像市子ども基本条例』宗像市HP、平成24年。

「遊ぶ資源」としての幼保・学校との関わり方

子どもの日常生活の場所、子どもが居る場、それは幼稚園、保育園、学校。
 「遊びの場づくり」という切り口から見たとき、幼保・学校はどう見えてくるのでしょうか。
 子どもの遊びと幼保・学校が、楽しい関係になるために必要なことを一緒に考えましょう。
 【担当】古野陽一（NPO法人子どもとメディア専務理事）【講師】正田克宏、菅千恵子

美浦幼稚園の取り組みについて

■菅千恵子さんからの話題（茨城県美浦村）

- 美浦村は・・・
 - ・茨城県の2つの村のうちの一つ。霞ヶ浦の南側の風光明媚な村。
 - ・陸平貝塚という大変大きな遺跡がある。縄文時代から人が暮らしていたところ。
 - ・民話もたくさん残っている。

- 美浦幼稚園は・・・
 - ・村立の幼稚園は一つ。他に私立幼稚園、村立保育所。村内にOBが大勢いる。
 - ・これまでも広報やサークル活動中心として、PTA活動が行われていた。

- この取り組みは・・・
 - ・子どもたちが体と心でたくさんのことを感じる機会を増やす
 - ・PTA活動を継続的にさらに元気になるきっかけ（園長先生 談）
 - ・その後のPTA活動への継続（そして、PTAだけではなく・・・）。
 - ・幼稚園を地域の資源として考えるきっかけ
 - ・自分たちの村は自分たちで変えていける、という体験の場のひとつ（大人も子どもも）

- 一年間取り組んできた役員さんの言葉
 - ・はじめは何が始まるのかわからないまま始まった。一年たってみて、いろんな人と会ってたくさん話しているんな事をして、自分でも学校の勉強とは違う意味で学ぶことがあった。

菅千恵子

だいすきようちえん
プロジェクト担当者



Why...?

なぜ、この取り組みをしたのか？

(教育長インタビューから)

乳幼児期は 脳の発達の重要な時期。

その時期に体も頭も使うことが **脳みそを育てる** ことになる。
 シゲキというのは **体と頭を懸命に使う事柄** があるということ。

その時に、大切なのは
子ども同士の関わりによる刺激 や、
ものとの関わりによる刺激 だけでなく、
大人と関わることによる刺激。

これが **ものすごく大事。**

How...?

誰とつくったのか？

どのようにつくったのか？

- ・きっかけさがし
- 原案づくり
- 保護者と意見交換
- お試し企画 はたして現場に合う？
- 子どもチェック 子どもは外で本を読まない？
- 先ず **自力でつくる** そして **職人さん**
- オープニング企画
- 冊子づくり **だいすきようちえん**

みんなで見つけたこと！

〇〇できる幼稚園

一緒に育つ幼稚園づくり

社会へ発信する私たち

一緒に育つ幼稚園づくり

- ・PTAも 一緒にやる

→ 子育てを通じて **大人が** **親が** **私たちが** 育つ

ゆるやかに変容している

子どもたちは 素晴らしい！

育つ力を支えたい！ 幼稚園は地域の宝だ！

子どもも 大人も

「遊び観」を共有する大人の養成

学童保育や放課後の遊び場に関わる大人は、遊び観を培っていききたい。福岡市で毎年実施している「プレイワーカー（遊びのサポーター）養成講座」、また2008年からの学生プレイワーカーの育成も取り組んでいます。大人が学ぶ「遊び観」について話題にしていきましょう。）

【担当】 山下智也（きんしゃいきゃんぱす代表、西日本短期大学助教、PLAY FUKUOKA）

分科会の成果

参加者同士が自由に語りあったことで多くの気づきがあったこと、具体的に「共有」のためには、一方向的に伝える（＝おしつけ！）のではなく、広く周囲に伝え、伝える大人を増やしたり、伝えるツールをみつける必要があるということが確認されました。もちろんそのためには、「遊び観」のある程度の共有も必要ですし、伝える大人を増やしていく「大人の養成」の仕組みも不可欠です。その重要性が浮かび上がってきたワークショップでした。

いまあの時の分科会を振り返って思うこと

この分科会では、タイトルを分解・分析しながら、ワークショップスタイルを進めてきました。「遊び観」ってそもそも何？みんなの「遊び観」は？「共有」ってどうしたらできるの？そもそも「共有」必要？「共有」するときに必要なことは？「大人の養成」はどうできる？・・・

参加者が主体的に語り合う中で、多くの気づきがありました。いきなり「共有」ではなく、まずは自分の「遊び観」とじっくり向き合うこと、そして「共有」をしていくには、一方向的に伝えるのではなく（おしつけになってしまう！）、70%くらいの伝え方が重要であること。当然伝えるには聞く姿勢もセットで。さらには、伝える大人を増やしたり、伝えるツールをみつける必要があるということが確認されました。

伝える大人を増やしていくという意味での「大人の養成」の仕組みづくりについては、もっと議論を重ねる必要があることも確認されました。

まさに参加者たちが創り上げた分科会。それぞれの「収穫」が、各現場に還元されていくことを願っています。

ふだんの生活空間を遊び場に

家のすぐそばは、子どもにとっても大切な空間。「ストリート・パーティー」「プレイ・ストリート」。そして七輪を置いたら、あら不思議。「ねえねえ、何やってるの?」と、湧き出る遊びゴコロとおしゃべりの声。住む人中心の空間に取り戻す「遊ぶ風景」について考えましょう。

【担当】たけざわまき【講師】西川正、嶋村仁志

分科会の成果

みち

道には未知なる可能性がある。

分科会では嶋村仁志氏により、イギリス、石巻などのストリートプレイの紹介がありました。その紹介の中で、道を封鎖して、生の芝生や人工芝をひいて公園なるもの作るというものがあったり、砂をひいてビーチマットなどを置き、砂浜のような雰囲気を作り出すという空間そのものを楽しむものがありました。この他、ながーい机を道の上に繰り出して地域のみんなで持ち寄りの食事会をするなど様々な道遊びの場面をスライドで共有しました。道は車が通る場所という概念を覆すような遊び心に、皆心を打たれていた様子です。

小さなことからコツコツと

**七輪とかけてこの分科会に出た私の心ととく
そのころは…どちらも火がつくでしょう。**

嶋村仁志氏のストリートプレイの紹介の後に、担当者武澤より自宅付近で開催している1畳プレーパークについて話をさせて頂きました。七輪という小さなものを道の上に出し、通りがかる方に声をかけるという話をさせて頂いたところ、「私にもできる!!」と共感して下さった方が多くいらっしゃいました。「誰にでもできる」遊びはそんなに難しいものではないという話を共有できたのがとても良かったです。

みち

小さなことから
コツコツと

日常のくらしの中に
子どもの遊ぶ風景を
とり戻す

冒険遊び場へ行きなさいなんて言わせたくない。

日本全国七輪の日を

「日常のくらしの中に子どもの遊ぶ風景を取り戻す」という言葉は、分科会担当の私たち3人が一番最初に話した際に出たテーマでした。現在40代の私たちの子供時代は、特に意識せずとも街中や道路、自然の中など、日常生活の中に遊ぶ空間を見つけ出し遊んでいました。現在ではそんなことが難しい世の中になったと感じています。そこがこの分科会のスタートでした。

たけざわまき

一畳プレーパーク

西川正

NPO 法人ハンズオン
埼玉

嶋村仁志

日本冒険遊び場づくり
協会理事、TokyoPlay

いまあの時の分科会を振り返って思うこと

私たちは「ふだんの生活空間を遊び場に」というテーマで分科会を行いました。参加者は36名いらっしゃいました。嶋村さんがロンドンや石巻で行われている、道において繰り広げられる遊びの紹介をしてくださりました。その後、武澤が埼玉県川口市で行う1畳プレーパークについて紹介しました。そして、参加者を6名ずつぐらいのチームに分かれてもらい、それぞれ道で遊んだ話をしてもらいました。子どもの時の話をすると、みなイキイキとなりとても楽しんでいるように思いました。そして、私たちが思いもしなかったような新しい発見（防災訓練で七輪講習をできないか）など様々な意見が繰り広げられました。

実は、私たち3人は当日まで顔を合わせることができませんでした。前日に福岡で顔を合わせ、打ち合わせをしました。時間は短かったですが話したいことがすぐに定まり、ファシリテーターの技量もあり大成功の分科会でした。

普段、まったく別の活動をしている3人でしたが、子どもが道で遊んでいる風景を取り戻そうという考えが合致して、多くの言葉を必要とせず、和気あいあいと会を遂行することができました。この経験はこれからの活動に生かしていきたいなど強く思いました。

事故対応シミュレーション～初級編～

冒険遊び場で事故発生！その時、みなさんはどのように対応していますか？

むやみに危険をこわがらない為に。ぜひ、一緒にシミュレーションしましょう。具体的な事例を元に、事故発生時の対応と連携、そして、事故発生後に付随するトラブルへの対応を考えます。

【担当】森川和加子【講師】大垣内弘美

事故対応シミュレーション～危険とつきあう力を育てる・初級編～

ふれさせたセミナー事故対応編から

大垣内弘美

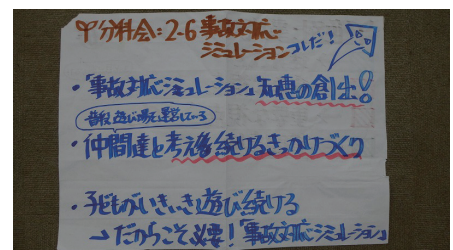
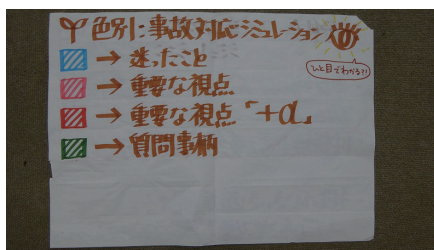
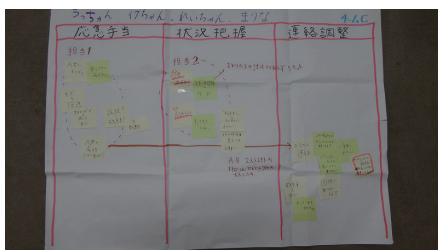
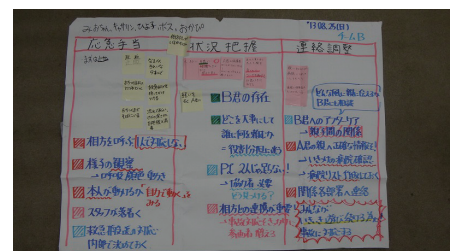
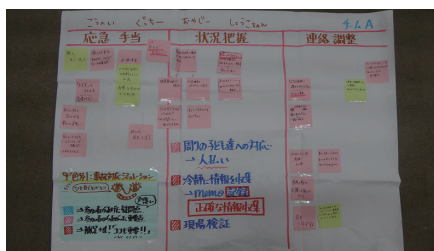
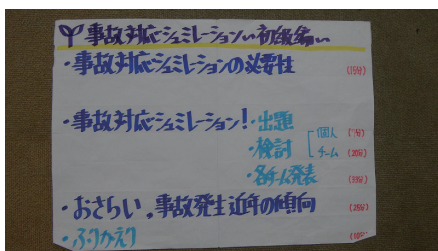
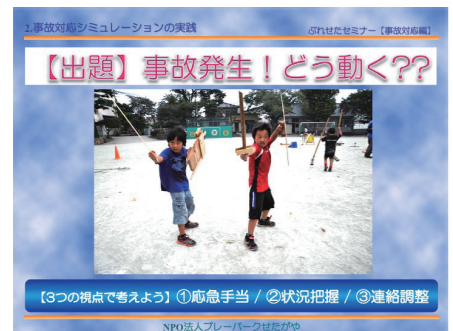
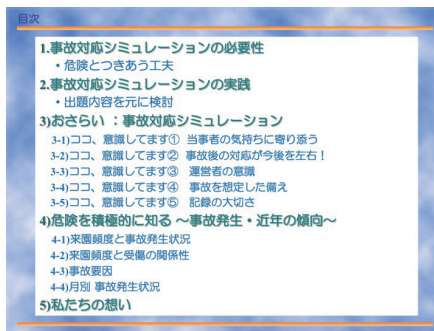
NPO 法人
プレーパークせたがや

プレーパークせたがやが経験してきた具体的な事例をもとに、そのとき自分だったらどう動くか、事故が起きたときのことをグループで話しあいながらシミュレーションしてみます。

こどもの自由な遊びを妨げないためには「事故はつきもの」と捉えて備えておきましょう。



NPO法人プレーパークせたがや



▼今日の分科会に参加して、どんな気づきがありましたか？

- ・とてつもない気づき！
事故が発生しても、その子がこれからいまいきと遊び続けられるように！！私たちは、色々と事前準備が必要だと感じました。
- ・事故対応シミュレーションをほとんどしていない！恐怖を感じました。
- ・事故対応の為に事前にやっておくべきことがたくさんあることに改めて気づきました。
- ・けがはない方がよいが、運営者として何回もけがに対応したりする中、けが対応の経験値が高いと、「対応すること / すべきこと」がわかってきて、冷静に対応できる。
- ・けがだけでなく、加害者側 / 被害者側等、気持ちを考えるようになる。
- ・同じシミュレーションは複数回やったことがあるけど、それでも毎回「あたりまえ」と思いすぎて、思い出せないことがあることに気づきました。実際は動けるのに、シミュレーションにすると抜けるなー。
- ・「事故対応シミュレーションを何の為にやるのか」根本的なことに気づきました。“その後も遊び続けられるように”という日常を常に意識することが本当に大切だと気づきました。
- ・フレイパークを実施するにあたって、メンバー共通の事故対応シミュレーションをしなければいけないな、とつくづく思いました。
- ・事故に対して、フレイパークの対応 / 事故に関わった人へのフォローが大切なことに気付かされた。大人の人に協力してもらえるように、普段からのコミュニケーションが必要だと思った。
- ・自分自身が気づいていない所も多く、すごく勉強になりました。
- ・私達のグループでも色々なリスト作りをしたいです。(歯のけがについて、びっくりした)
- ・事故対応シミュレーション…。一体どんなことをやるのだろう…。と思い参加しました。私はフレイリーダーになることはないけど、皆さんの話を聞いて、対応の仕方1つにしても、色々あるんだなあ、と思いました。今日聞いた話を、いつか実践する日がきたら、今日のことを思い出して実行したいです。
- ・スタッフ間の連携の大切さが想像しているより深い。
- ・前もって準備しておくことの大切さに気づいた。
- ・今回の参加を通じて、フレイパークを続けることの意味を改めて認識した。
- ・「自分の身は自分で守る」これは大人社会にとっても大事だと改めて気づいた。
- ・1人で子ども5人を遊ばせることが多く、事故には興味があり参加したが、多くの気づきがあった。

▼今日のワークショップに対する感想を自由にお書きください。

- ・「ずっと課題が続いていく」という、わかさんの言葉が印象的でした。遊びと危険が比例していく、というジレンマというが難しいけれど、遊びを保証したい。これからは頑張りたいなー、と思いました。
- ・事故対応を考えるきっかけ。本当に参考になりました。ありがとうございました。
- ・1人1人がしっかり発言できるように配慮してくださって、とてもいいやすい雰囲気でした。
- ・他の団体のやり方、気づかなかった部分に気づくことができた。
- ・自分が所属していない団体のみんなと考えることが本当に楽しかった！表にポストイットでのせていって、+αでかき書きでむ形は、視覚的にもすごくわかりやすかった！世田谷のデータも本当に面白かったです。“危険を積極的に知る”という発想がいいな。大事！
- ・具体的に起こり得る事故を想定して自分だったらどう動くか、①応急手当、②状況把握、③連絡調整の3つの視点で処置を考えられていてとてもよかったです。今までこういう事故・けがのときは、こういう応急処置を…、そして、自分たちで無理なときは病院へ…、みたいな考え方だったので、もっと「本当にこういう状況で、こうなったら…」と具体的なシミュレーションができてよかったです。ありがとうございました。帰ってから、メンバーで早速学習会をして、共通理解をもとだと思います。
- ・フレイパークの事故対応に対する考え方がよくわかりました。
- ・とっても楽しかったです。帰ってから、グループでシミュレーションやってみます！
- ・楽しかったです。
- ・全てが学びになりました。有意義な時間をありがとうございました。
- ・今日はシミュレーションでしたが、事故対応等の講義も聞いてみたかった。
- ・他人の子の事故シミュレーションや別の人を頼れる事って大切だと思う。

▼今後参加してみたい講座は何ですか？

- ・事故対応シミュレーション「中級編」
- ・事故対応シミュレーションをもっといろいろ受けたいです。
- ・中級編 / 上級編も参加してみたい！
- ・応急手当の講座。主にどのような場合にけがをするのか。
- ・中級編 / 上級編に参加したい！
- ・フレイパーク参加者との関係づくり(保護者含む)
- ・自分が遊ぶ体験がしたい。

分科会の成果

今回の分科会では、活動する場所も関わり方も違うメンバーが集まり、それぞれの活動場所での経験を生かした知恵を出し合いながら、今回のメンバーの知恵のフル創出で事故対応時に大切にしたいポイントの表をつくりあげることができた。

事故の対応に正解やマニュアルはない。子どもや場、事故の状況によって対応は変わってくる。だから、事故が起こったときに、仲間たちと話し合い、それぞれの経験による知恵を出し合いながら、その時できる最大の対応していくことが大切なのだ考える。

事故が起こったときにどう対応するか、どんなことを大切にしながら対応を考えていくかをシミュレーションしていくことは、危険や事故というものをどう考えるかを仲間たちと話すきっかけになる。また、危険や事故は、場づくりや遊具づくり、子どもの遊びなど考えるときに、切り離すことのできないものでもある。だから、事故対応シミュレーションは、一緒に活動する仲間たちと危険や事故について考えることであり、冒険遊び場や子どもの遊びを考えるきっかけとなるものなのである。

事故対応シミュレーション
「知恵の創出」

仲間たちと危険や事故について考える
きっかけづくり

子どもがいきいき遊ぶ場をつくり続ける。だからこそ、必要！
事故対応シミュレーション！

事故対応シミュレーションをするのはなぜか。

それは、子どもがいきいき遊び育つことを大切にしたいから。

事故が起きないことだけを重視し、禁止事項ばかりが増え、子どもがいきいき遊ぶ環境が奪われていく中で、私たちは、子どもがいきいき遊ぶことの必要性を感じ、活動している。そんな、私たちは、事故や危険を恐れるだけではなく、事故や危険について積極的に知り、考えていくことが大切なのだ。

子どもがいきいき遊ぶ場をつくり続けたい、だからこそ、私たち大人は事故対応シミュレーションを通して、危険や事故、子どもの遊びについて考え続けていくのだ。

いまあの時の分科会を振り返って思うこと

今回の分科会をつくる過程は、担当者である私にとって学びの多い時間でした。事故事例をつくること、事故対応時に大切にしたい視点を整理すること、事故を通して得られてきたことを振り返ること、すべてが今までの冒険遊び場での経験を改めて振り返る機会となりました。

その中でも、プレーパークせたがやで起きた事故8年分のデータをまとめ、分析したことで、事故の傾向や怪我と事故から見える子どもの現状などがより明確に見えてきたのは、私たちの大きな財産になりました。

分科会当日は、参加者のみなさんがとても積極的で、全員で充実した時間をつくりあげられたという実感があります。また、違う場所で活動している人同士が集まったことにより、様々な視点が出て、新たな気づきをもらえました。とともに、「子どもがいきいき遊ぶ場をつくり続けたい。だから、事故に対してしっかりと向き合っていきたい」という共通な想いをみなさんから感じることもでき、全国に同じ想いを持つ人がたくさんいるということが、とても心強く、大きなパワーをもらえました。

「事故や危険について考えることは、子どもの遊びを考えること」

子どもの遊びと事故の間で葛藤することはたくさんあるけど、事故や危険と向き合いながら、子どもがいきいき遊ぶ場をこれからもつくり続けたいと思っています。

この分科会でのみなさんの学びが、その後のそれぞれの活動に活かされていたらとても嬉しいです。

参加者のみなさん、支えてくださったみなさん、本当にありがとうございました。

世界の冒険遊び場づくり

1943年にデンマークの「廃材遊び場」から世界各地に広がった冒険遊び場づくり。近年では、香港でも動きが始まりました。こうした冒険遊び場づくりを写真や映像で追いかけてみます。また2013年の国連における『子どもの権利条約第31条』の動きも話題にも触れていきます。

【担当】 嶋村仁志 【講師】 梶木典子

嶋村仁志

日本冒険遊び場づくり協会理事、TokyoPlay、IPA 日本支部

子どもの権利条約で「遊ぶ権利」に触れた第31条について採択された国連の「ジェネラルコメント No.17」という正式な取扱い説明書の解説と、ヨーロッパを中心に世界の冒険遊び場づくりの歴史をスライドと映像、文献での紹介を行いました。今の日本の冒険遊び場づくりの課題も見え、今後への問題提起ができた分科会となりました。

08:30

話題提供 子どもの権利条約第31条ジェネラルコメント No.17 について

梶木典子

日本冒険遊び場づくり協会理事、IPA 日本支部

■梶木さんからの話題

- ・NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会の前身となる「冒険遊び場情報室」が置かれた国際 NGO の IPA (子どもの遊ぶ権利のための国際協会) は、2008年からロビー活動を積極的に行い、ジェネラルコメント採択までの流れに深く関わってきた。
- ・ジェネラルコメント No.17 では、「遊ぶ機会の提供」は締約国 (日本は1994年に批准) の責務であると主張しており、これは子どもたちの生活環境を考えるうえで、画期的な到達点である。
- ・ジェネラルコメント No.17 では、IPAにより世界各地で開催された専門家会議で集められた、子どもの遊ぶ権利を保障するために取り除くべき様々な阻害要因が紹介されている (暴力・貧困・戦争・高度にプログラム化された娯楽・過度な教育競争・管理責任追及の風潮など)。この資料は、IPA 日本支部でも入手可能となっている。
- ・ジェネラルコメント No.17 では、締約国政府を始めとして、社会の様々な支援者がきちんと「子どもの遊ぶ権利」を保障できるように、「遊び」や「遊びに関わる人々のあり方」がていねいに解説されている。いくつかの日本語訳も紹介されているので、冒険遊び場づくりに関わる人は、子どもの遊びを保障する基本的知識として、子どもの遊ぶ環境づくりの大きな力となるので、ぜひ一度読んでほしい。

08:45

話題提供 世界の遊び場

- ・1943年に始まったデンマークでの「廃材遊び場」や、1950年代初頭～1970年代のイギリスでの「冒険遊び場」、そこに関わった人々を写真や映像で紹介した。その他、ドイツやカナダ、香港、日本で冒険遊び場づくりが始まった経緯などを紹介した。
- ・1950年代のイギリスでの冒険遊び場プレーリーダーとしての経験を記した『グラウンド・フォー・プレイ』(日本語版: 鹿島出版会)にある、「報告書は内輪で回覧されるだけ」「冒険遊び場は、悪意を持って見ている人たちと同様に、熱心な推進者からも誤解を持って受け止められていることがある」などの視点は、今の日本の冒険遊び場づくりにも共通の課題ではないだろうか。

最近の大きなニュース

子どもの権利条約第31条について 国連から「一般的意見」が発表されました

- 「遊ぶ権利」が含まれている第31条は「忘れられた権利」として長らく放置されてきた。
- 2008年にオランダのファン・レーア財団の助成で実施した世界専門家会議が元になり「子どもの遊びが阻害されている要因」を調査。
- その結果を元に、国連子どもの権利委員会が審査 2013年2月に条約としては17番目に交付された
- 「一般的意見」は、各締約国に向けて書かれた「解説書」。政府はこれに基づいて5年毎の報告を提出しなければならない。

『世界専門家会議東京ラウンド』は、遊びの阻害要因を4コマ漫画で表現していった。

世界の冒険遊び場づくり

～冒険遊び場全国研究集会 in 福岡～



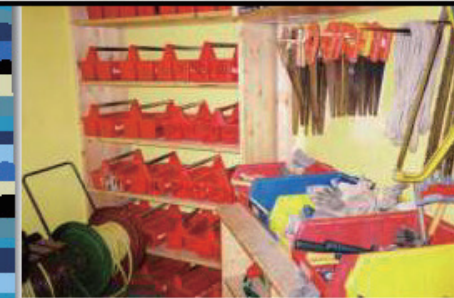
2013年8月25日(日)
モーニング・プログラム
嶋村仁吉



1967年に開園したドイツで最初の冒険遊び場
「メルキッシュ街遊び場」(ベルリン)



1974年に成立した「健康安全法1974」以来、
イギリスでは大型遊具が中心の遊び場に。



工具の貸し出しはケースごと。



運営者やプレーリーダーが仮装して夜の居酒屋
を回りながら募金を集める(飲みながら)。



フランクフルトに駐留していた米軍が撤退した
跡地に作られた「コロラドパーク冒険遊び場」



Endrup Skrammellegepladsen
エンドラップ廃材遊び場、コペンハーゲン
1943

写真: Rysz Kozlovsky, <http://www.adventureplay.org.uk/index.htm>

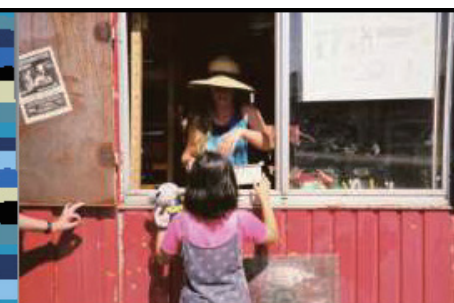


子どもたちはやはり家づくり。



ロンドン市内の
デブフォード
冒険遊び場。
10mの高さから
吊られたターザン
ロープ(1999)。

イギリスでは、こ
うした遊び場はも
うほとんどない。



道具を借りるには、子どもはカードや人形、
帽子など自分のものと交換が必要。

世界の冒険遊び場づくり

2013.08.25 冒険遊び場全国研究集会資料
嶋村仁志

イギリス

(詳しくは、「イギリスの動き・ロンドンの冒険遊び場」を参照)

都市計画家であったハートウッド・オブ・アレン夫人(Lady Allen of Hurtwood)が1945年に北欧を視察した際に、デンマークの「エンドラップ廃材遊び場」を訪ねたのがきっかけとなる。雑誌に寄稿した写真つきの記事が評判となり、1948年には、ロンドンで初めての廃材遊び場が作られる。1953年ころからの議論により、「廃材遊び場」の名称は「冒険遊び場」に変化していった。全国には150か所の冒険遊び場があり、そのうち80か所がロンドンにあるとされている。1979年の健

康安全法以降、危険をとにかく排除する風潮が社会に広がり、1990年代にかけて、冒険遊び場の動きは縮小し始めた。1997年に労働党政権が生まれて以降、2008～2010年にかけて、政府からの子どもの遊び環境整備への予算がつけられ、全国で貧困地域を中心に新しく30か所の冒険遊び場が作られることになった。ただ、2011年には政権が交代し、急激で大規模な予算削減が実施されており、事業の縮小や解雇などが大幅に進んでいる。



『グラウンド・フォー・プレイ イギリス冒険遊び場事始め』

ジョー・ベンジャミン著 嶋村仁志訳

鹿島出版会 2011

1950年代にロンドンや北部イングランドで冒険遊び場のプレーリーダーを歴任した著者が、デンマーク、アメリカ、イギリス国内の冒険遊び場の歴史を解説する。また、著者のプレーリーダーとしての実践経験から得た子どもとの交流、発見、苦悩のエピソードを、当時の実際の現場日誌から紹介。

ドイツ

1967年にベルリンで始まった冒険遊び場(Abenteuer Spielplatz)づくりは、フランクフルト、デュッセルドルフ、ハンブルグなど全国に広がった。一時期は400を超える常設の冒険遊び場が全国にあると言われ、ベルリンだけでも50か所を数えた。また、冒険遊び場は、「こども農場」の活動とも近い関係にあり、「冒険遊び場・子ども農場協会」という団体がドイツ国内の情報の集約や発信を積極的に行っている。冒険遊び場は、コ

ミュニティにある子ども施設として広く認知されており、社会に溶け込んでいる。一方で、行政府の関心は公教育に流れているとも言われ、運営は難しくなっていると言われている。ヤギや馬などの動物を飼っている遊び場や、払下げの宅急便車や消防車などを使った移動遊び場(Spiel Mobile)の活動を連動させている都市もある。地域によっては、貧困児童向けの朝食・昼食プログラムなどを実施しているところもある。

スウェーデン・デンマーク

都市計画家であったソーレンセン教授は 1931 年に執筆した『公園政策』の中で、「子どもが作り上げたり、夢見たり想像したものを実現できる廃材遊び場のようなもの」について触れている。この「廃材遊び場」は、デンマークのコペンハーゲン郊外にあるエンドラップという住宅街で 1943 年 10 月に実現した。その後、各地で広がりを見せたが、危険性と見た目の汚さから 1980 年代に衰退したと言われる。一方で、「デンマーク遊び場協

会」も設立され、積極的に情報発信や研修などが行われている。今でも「建築遊び場」として各地で活動が展開されている。また、両国は難民の受け入れも積極的に行っているため、冒険遊び場は子どもを持つ難民の親たちの居場所という機能としても貢献している。冒険遊び場やユースセンターの職員の中には、夜回り先生の公務員版とも言える「ストリートワーカー」として、困っている子どもたちの最前線に身を置く人も多い。

カナダ

1970 年代にはカナダ東部の都市部にて冒険遊び場の実践があったと言われているが、その後の動きは途絶えていた。2005 年に開催された IPA(子どもの遊ぶ権利のための国際協会)世界大会(ベルリン)の際に、日本の冒険遊び場の取り組みに触れたカナダ支部の代表キム・サン

ダーソンが中心となり、2006 年 9 月にアルバータ州エドモントンにて 3 週間の試験的な冒険遊び場づくりを実施した。大学やメディアを巻き込んだプロジェクトとなったが、その後に遊び場が常設として定着することはなかった。

香港

香港智楽遊戯協会(Playright)は、アメリカ出身のフリーランス・プレイワーカーで、世界中で地域の人たちとの遊び場づくりをしていたジミー・ジョリーの協力で 1999~2001 年に冒険遊びフェスティバルを実施。2002 年には、柴湾地区の住宅街にある公園にて試験的に半年間の遊び場を開催した。その後、公園・レクリエーション当局からの支援は得られず、冒険遊び場づくりの動きは止まった。Playright は、病院での長期入院児のためのプレイワーク、商業施設内の遊び場づく

りなどの事業に移った。その後、2012 年になり、香港でも外遊びの大切さが子育て環境として注目されるようになってきた。しかし、前回の経験から、「冒険遊び場」という言葉では定着しづらいという判断になり、「地域で作る遊び場(Community Built Playground)」として打ち出すことになった。そこで、子ども環境への支援に熱心な香港ディズニーランドが支援を快諾し、2013 年 4 月に試験的なプロジェクトを実施した。

他にも、1950 年代からアメリカ合衆国、スイス、オーストラリアなどでも実践がある。スイスでは「ロビンソン遊び場」として位置づいており、オーストラリアでも国内に数か所の冒険遊び場がある。

イギリスの動き・ロンドンの冒険遊び場

	イギリスの動き・遊び場をめぐる動き	冒険遊び場の動き
1946 1948	マージョリー・アレン(ハートウッド卿アレン夫人)がデンマークを訪問。エンドラップ廃材遊び場に出会い、帰国後、Picture Post 誌に紹介。	イギリス初の廃材遊び場がロンドン市内カンバーウェルで始まる。
1953 1956	NPFA(全国運動場協会)で「廃材遊び場」の「廃材」という言葉のイメージの悪さが遊び場の広がりにも影響を与えているという声が出る。アレン夫人などの提案により、「冒険遊び場」という名称が提案された。 NPFA(全国運動場協会)内に「プレーリーダーシップ・冒険遊び場づくり推進部門」が作られ、1971年までに全国で7人の地方担当官を持つまでに発展する。	1948～1960年に作られた冒険遊び場は17。ロンドンだけでなく、リバプール、ブリストル、グリムズビーなどイングランド各地に冒険遊び場は広がった。 資金や土地の獲得、運営グループの維持など難しいことも多く、こうしたコミュニティの成長に必要なプロセスを担うため、プレーリーダーが雇用されるようになった。
1962 1970		「ロンドン冒険遊び場協会」が設立される。メンバーは、市内4つの冒険遊び場。 協会に所属する冒険遊び場は8か所に増える。7か所はLEA(内ロンドン教育庁)から運営資金を得ていた。 チェルシーに初めて「障がい児のための冒険遊び場」が作られた。
1974 1976 1978	「労働環境における健康安全法1974」が成立し、行政が運営する冒険遊び場での管理責任への不安が深刻化し始める。 子どもたちの政治的無知をなくそうと、ロンドン市内「イズリントン区遊び場協会」が人種差別や失業問題、性差別をなくそうと講座を開くが、「冒険遊び場は左翼の拠点」として全国紙で批判を受ける。 全国の冒険遊び場は260(うち、ロンドン100)と報じられている。	1960～1970年代にかけて、プレーリーダーは賃金が安い一方、強靱な肉体・誰からも尊敬される人間性・見栄えのよい報告書作りの技術など、数多くのものが求められ「燃え尽き現象」を起こす人も少なくなかった。 右翼・国民戦線によって、外国人プレーリーダーを冒険遊び場から排除しようとする動きが見られた。 内ロンドン教育庁が「次年度から新しい冒険遊び場への助成はない」と宣言。ロンドンの冒険遊び場の広がりには、終止符を打つ。
1984 1985 1986 1987	子どもの遊び環境を専門にした行政法人PLAYBOARDが設立され、政府・自治体の施策づくりに向けた調査研究、情報サービス、プレーリーダーのトレーニングについての全国基準づくりなどを事業とした。 GLC(大ロンドン評議会=東京でいう東京都)が解消。ロンドン全体を代表する自治体が消え、32特別区とシティと呼ばれる小単位の自治体だけが残された。 PLAYBOARDが解散させられる。子どもの遊びに関する事業を行政法人「スポーツ協議会」に吸収させる政府の方針に反対したことが理由。	住民運営だった冒険遊び場は、運営の大変さから1970年代に入り、自治体が運営を引き継いだところも多くあったと言われる。1985年までに189の自治体に冒険遊び場があった。 GLC(大ロンドン評議会)が解消したことにより、内ロンドン教育庁も1990年に解散となり、ロンドンの冒険遊び場は運営のための資金源を失うことになった。
1992 1995 1996 1997 1998	英国政府は遊び環境に関する政府事業の委託を決定。32の全国規模のNPOが集まった「子どもの遊び協議会」が結成されたが、入札は、政府系の「全国運動場協会」が単独で全事業を勝ち取った。 労働党が保守党に圧勝。福祉を切り捨ててきた1980年代からのサッチャー政権の流れがついに途切れる。 GLA(大ロンドン庁)が設立される。	ロンドン冒険遊び場協会は、冒険遊び場の統括団体という立場を離れ、活動を全国に広げてPLAYLINKという名称に変更した。 Torkildsenレポートが、子どもの遊び環境に関するニーズをロンドンで調査。ロンドン全体を視野に事業を展開する中間支援組織作りが優先課題という提案をする。その提案を受けて、「London Play」が設立される。

2001	<p>全国宝くじ基金の組織改編により、助成先の見直しが検討される。前政権の文化大臣クリス・スミスへの地道なロビー活動も実り、子どもの遊び環境向上のために2億2500万ポンド(337億5000万円)が割り当てられることになった。助成金は2005年から、各自治体が資金を獲得するには、多分野協働・NPOの参画なども含めた「子どもの遊びに関する施策」づくりが条件とされた。</p>	<p>London Play が、自治体の子どもの遊び環境への取り組みを審査する「Quality in Play」というプログラムを発表。審査やコンサルティングには、経験の長いプレイヤーも加わった。</p>
2002	<p>政府文化省の依頼で、前健康大臣の Frank Dobson を座長に、子どもの遊び協議会代表 Tim Gill をブレンに、子どもの遊びに関する全国調査を実施。</p> <p>「遊びの安全フォーラム」が遊びの中での危険について見解声明を発表。「子どもの健康的な成長には、遊びの中での危険要素が欠かせない」として、政府健康安全局が理解を示す。</p>	<p>London Play は、「世界ボランティア年」にメディア・トラストの助成を受け、「冒険遊び場の運営を助けよう」と題した映像を制作。他にも、冒険遊び場の運営に関わりたいロンドン市民のための「スタート・バック」を開発した。</p> <p>London Play が「年間冒険遊び場大賞」を設立。キャピタル FM がスポンサーとなり、優勝した冒険遊び場には50万円の物品助成が行われることになった。審査員は前年に優勝した遊び場の子どもたち。</p> <p>ロンドン市は、London Play に委託して制作した「子どもの遊びに関する総合施策を作るためのガイド」を発表。</p>
2004	<p>ウェールズ国民議会政府が、世界初となる政府による「子どもの遊びに関する総合施策」を発表した。</p>	
2006	<p>ロンドン市内のケンジントン & チェルシー区が「子どもの遊びに関する総合施策」を発表。</p>	
2007	<p>政府文化省がブックレット「Time for Play」を出版。政府各省庁の遊びに関する施策の紹介や、子どもが遊ぶことの意義などが盛り込まれた。</p>	<p>ロンドン市ヘリンゲイ区で1979年以来初となる新しい冒険遊び場が誕生した。開園に際して、政府健康安全局は、「遊べ子どもたち。人生は冒険だ」キャンペーンで支援した。</p>
2008	<p>政府が2億3500万ポンド(352億5000万円)の追加支援を決定。貧困地域を中心に30か所の冒険遊び場の新設、3,500か所の児童公園のリニューアル、4,000人分のプレイヤーの研修費用として使われることになった。</p> <p>Tim Gill が「危険を恐れる社会に育つ」を出版。政府からも「子どもを真綿にくるんだまま育てては危ない」という論調が出てくるようになった。</p> <p>冒険遊び場は、学校などの施設と同様に、公共施設の閉鎖権限も持つ Ofsted(教育監督局)の管轄下にあった。それに反対するロビー活動が実り、「遊び環境および自由に出入りできる施設は学校施設とは違う」という判断が下され、冒険遊び場は Ofsted の管轄外になった。</p> <p>労働党が保守党に敗れる。大規模な予算削減が宣言される。中には、子どもの遊びに関する事業の予算が60%カットされる自治体も出てきた。</p>	<p>London Play が、冒険遊び場60周年を記念して、ロンドン市内で「冒険遊び場ウィーク」を開催。映画館を貸し切り昔の映像を見られるようにしたり、冒険遊び場遠足ランチを企画したり、フォーラムを開催するなどした。</p> <p>ロンドン市役所にて、「新しく冒険遊び場をつくる行政向けフォーラム」が開催される。日本からは鳴村仁志が基調講演者の一人として発表を行う。</p> <p>参考文献: An Architecture of Play: A Survey of London Adventure Playgrounds, Nils Norman, 2008, Four Corners Books Chronology of Significant Events in the History of LAPA / PLAYLINK, 1994 Playrights Magazine, IPA, March 2007</p>

分科会提供者からのコメント

梶木典子

子どもに関わる世界の専門家や実践者の知識や経験の結晶「ジェネラルコメント No. 17」を勉強してみて！

活動の数は増えたけれど…。これからの冒険遊び場づくりのあり方を振り返る時期！

嶋村仁志

分科会の成果

子どもの遊ぶ権利

「忘れられた条文」
から「当たり前」
の大切さへ

日本の冒険遊び場づくり、
危うくない？

子どもの権利条約の中でも「忘れられた条文」と言われる第31条「遊ぶ権利」について、国連が採択した解説書「ジェネラルコメント No.17」は、冒険遊び場づくりを進めていく上でも欠かせない参考書となるでしょう。

ソーレンセン教授やアレン夫人など、名前もうっすらしか知らない世界の先駆者たちを写真で見てもらいました。今、世界でも冒険遊び場づくり活動が一番盛んな国である日本の行く末が問われています。

どれくらいの方が
気づいてるんですか？

実は、今の日本の冒険遊び場は、イギリスで冒険遊び場が生まれて30年経った1970年頃にそっくりな危うさもあることが見えてきた。でも、そうしたことを意識して冒険遊び場を振り返ろうという人は少ないのでは？というコメントがあった。

<参考資料>

・国連子どもの権利条約第31条ジェネラルコメント No.17 (国連子どもの権利委員会)
『グラウンド・フォー・プレイ イギリス冒険遊び場事始め』ジョー・ベンジャミン著・嶋村仁志訳・鹿島出版会 2011

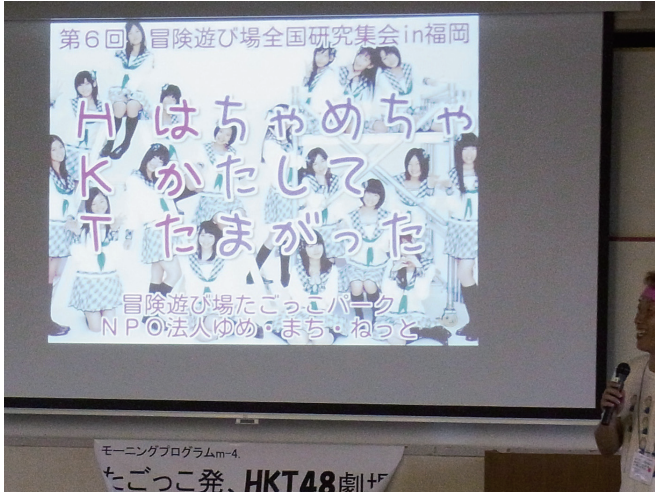
冒険遊び場たごっこパーク発 HKT48劇場

たごっこパークのHハチャメチャ・Kかたして(仲間に入れて)・Tたまがった(驚いた)名珍場面48シーンをお届けします。

渡部達也

NPO 法人ゆめ・まち・ねっと

【担当】 渡部達也



分科会の成果

はちやめちや・かたして・たまがった

ご当地人気アイドルHKT48の音楽に乗せながら、「冒険遊び場たごっこパーク」の子どもたちのHはちやめちや、Kかたして（博多弁で仲間に入れて）、Tたまがった（博多弁で驚いた）な48場面をお届けしました。

たまがった
かたして
はちやめちや

子どもは遊ぶ

そのままでええねん

子どもは遊ぶ

ベーゴマ大会や釘刺し大会、クリスマスリースづくりといったイベントやプログラムがまったくないのにはちやめちやに遊ぶ「冒険遊び場たごっこパーク」の子どもたちの姿にイマドキの子どもたちも環境さえあれば遊ぶんだということが伝わったことでしょう。

そのままでええねん

48場面目のBGMは、HKT48ではなく、ウルフルズの「ええねん」。これだけ行生き生きと遊んでいる子どもたちが学校で家庭で、ともすると地域でも欠点、苦手、短所を指摘され続ける。だけど、子どもたちはそのままでええねん、そう思いませんかと投げ掛けました。

いまあの時の分科会を振り返って思うこと

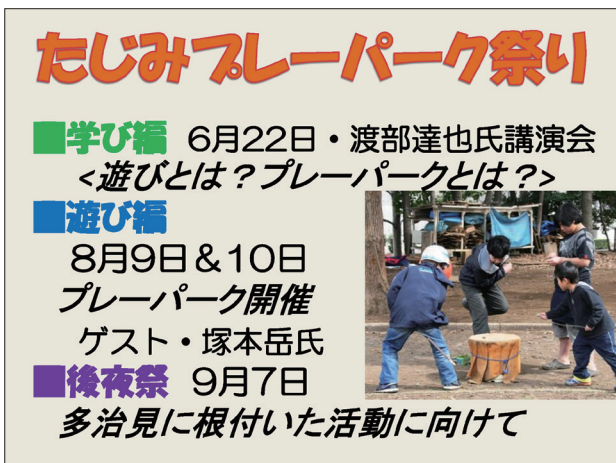
参加する分科会も、そもそも冒険遊び場に関わる立場も違う人たちが子どもたちの遊ぶ姿に爆笑、爆笑、また爆笑。実は今の社会では、そんな子どもたちの遊びを笑って見守れない大人もたくさんいる。子どもの遊びの価値をたくさんの仲間と共有できたことは、自分たちのその後の活動にも元気を与えてくれました。（静岡県富士市「冒険遊び場たごっこパーク」みっきい＝渡部美樹）

前回の全国研究集会で真剣な討議をしつつも、子どもの遊びの原点にいつも立ち返りましょうという意図を込めてお届けした「AKB48劇場」。「冒険遊び場たごっこパーク」の子どもたちのAあぶない・Kきたない・Bばかばかしい48場面をお届けしました。あれから3年、全て新ネタで「HKT48劇場」を上演。また3年後にどんな「48劇場」をお届けできるのか。遊びの名場面・珍場面を提供し続けてくれる子どもたちとこれからも地域の中で共に生きていけたらと思っています。（静岡県富士市「冒険遊び場たごっこパーク」みっきい＝渡部達也）

たじみプレーパーク楽風 ～始まりまでのこの1年の歩み～

「たじみプレーパーク楽風」立ち上げの道のりをまとめました。

【担当】浅井智子、前野学美



夢の実現

近くにプレーパークがあったらな、と我が子のために思い描いた母の願いと自分の本当にやりたいことはなんだろう??と模索続けた若者の思い。それらの思いの先にあった『プレーパークを創る!』という夢が2013年春、とうとう実現を迎える。

夢の実現

想いの結集

人との出逢いに
紡がれて

想いの結集

プレーリーダー養成講座に集まった岐阜県東濃地区の6人。初対面の人もいる中で、日々集い、語り、つながりを深めていった6人。『多治見に楽しい風を!』を合言葉に、新しい居場所つくりのために、ワクワクドキドキしながら自分たちの想いを結集して創り上げたのが『たじみプレーパーク楽風』。

人との出逢いに紡がれて

天野秀昭さん、嶋村仁志さん、渡部達也&美樹ご夫婦、塚本岳さんなど大先輩に導かれ、励まされながらの立ち上げとなった。また、多治見の地域の人々からも多くの支えをいただいて今の『たじみプレーパーク楽風』が形作られていった。こうした人々とのつながりの中に、自分たちがあるのままでいられる居場所を大人自身が見出し、生き方の問い直しにつながっている。

いまあの時の分科会を振り返って思うこと

自主発表の場があるとの事務局からの連絡に、一晩で創り上げた「たじみプレーパーク楽風」立ち上げの道のりを綴ったパワーポイント。ところが会場の環境が整っておらず、発表の機会がない中、たっちゃん（渡部達也さん/冒険遊び場たごっこパーク）の粋な計らいで、お時間をもらえることに。「たじみプレーパーク楽風」誕生に共に想いを寄せてくださったみなさんに、とても励まされました。（岐阜県多治見市「たじみプレーパーク楽風」とも＝浅井智子）
たっちゃんから頂いた大切な発表の場。たくさんの方に「たじみプレーパーク楽風」の誕生からの歩みをみていただけました。「自分たちの活動初期を思い出した」と言ってくださる方もいて、とても励まされました。歩みを振り返り、皆さんの前でお話させていただいたことで、大切にしたいことをしっかり噛み締められた気がしました。（岐阜県多治見市「たじみプレーパーク楽風」まな＝前野学美）



バザールコーナー

関内・小島（日本冒険遊び場づくり協会 事務局）

今回の全国集会では、参加団体のみなさまがお持ちのグッズや資料等を、有料もしくは無料で、おすそ分けできるバザールコーナーを設置しました。低い長テーブルをコの字型に配置し、当協会を含め約6団体が出展。靴を脱ぐ会場のため、終始アットホームな雰囲気交流できる場となりました。

グッズや資料等が、作られた方々の思いとともにお届けしてもらえるように、持ち込まれる方には、ご自身で販売いただきました。

開場時間帯は、原則としてプログラムの合間、懇親会のタイミングとなりましたが、多くの方がお立ち寄りくださいました。特に開催地である九州からの参加者さまは、当協会の出版物をはじめご覧になる方も多く、興味深く閲覧されていました。また、モンベル×冒険遊び場づくり協会コラボTシャツも大好評で、ご家族の分までご購入される方もいらっしゃいました。その場で着てくださる方も。

バザールコーナーは、各団体の活動紹介の場としても機能しており、普段はなかなか接することのできない地域の方々との交流の場として賑わいました。

まだ当協会に入会されていない方も多くいらっしゃり、閲覧用にご用意した当協会の会報「N遊S」を通じて、全国の冒険遊び場の活動に触れていただきました。今後のご自身の地域での活動に少しでもお役に立てる場となっていれば、私どもも嬉しい限りです。

プログラム以外にこのようなバザールの場があると、より冒険遊び場の理解が深まるのではないかな、と思えるような有意義な場所でした。



全体会

企画の方針

せつかく遠いところまで足を運んでもらって、全国の仲間と顔を合わせられる機会。最後の最後まで存分に時間を使って参加者のみなさんがとことん話せる全体会にしたい。しかし、これには実行委員会で議論がありました。全体会としては分科会での議論を全体で共有しなければならないし、そもそも200人で話すなんてそんなことできるのか。会場は狭いし、時間もないし、やったことないし。それでも、誰かが話すのをただ聞く全体会にはしたくなかったのです。確かに、他の分科会でどんなことが話されたのか気になるし、全部をダイジェストで聞けたら得した気分になれそう。しかし、時間をかけて話された分科会の内容の本質は、数分で簡単に共有されるものでもないはず。それよりも、各地での活動や分科会への参加を経て様々な実践や考えを持ち、情熱を燃やす参加者のみなさん同士が更に交じり合って起こってくることにきっと価値があるはず。「遊ぶ」を社会で支えるためには、誰かがお話してくれて、誰かがやってくれるのではなく、それぞれの思いやエネルギーが発揮され、「明日」の現場に繋がっていくことこそが大事だと考えました。運営側にすらゴールが見えず、本当にどうなるのか分からないスリリングな企画でしたが、何より遊び心を持ったみなさんとならこの時間も楽しめる、そう信じて賭けに出ました。(協会理事さんにとっては本当に賭け、そんな気分だったことでしょう。)

場の設定

そうした思いから、分科会の議論を全体として押さえた上で、オープンスペーステクノロジー(OST)を用いて対話の場を開くことにしました。全体会はみんなでお話する場にしたいということをお伝えし、講堂に参加者全員で円を描いて座ります。200名近い参加者全員での大きな輪。それだけでも壮観です。まずこれから起こることの4つの原則が共有されます。

- ・ここにやって来た人は、誰でも適任者である
- ・何が起ころうと、起こるべきことが起こる
- ・それがいつ始まろうと、始まった時が適切なときである
- ・それが終わったときが本当の終わりである

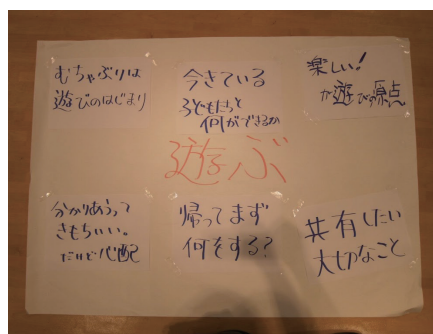
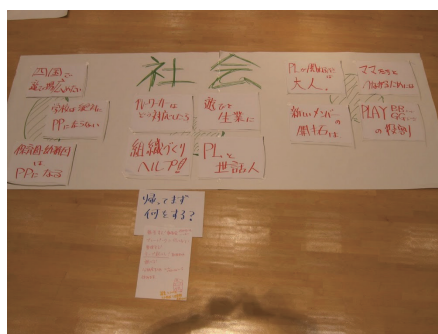
それから、みなさんがどんな風に参加できるかということが説明されました。まず、何かこんなことを話したい！というテーマを持つ人が、「ホスト(話題提供者)」として円の真ん中にある紙にテーマを書き、一緒に話しませんかと仲間を募ります。それから、ホストが出した話題に参加する「かたらしで！」の役の人があります。「かたらしで」とは標準語の「語らせて」と福岡の方言の「仲間に入れて」の二つの意味が掛かっています。また、話題の花と花を飛び回る「ハチ」や、話題を離れてひと休みする「蝶々」の役もあり、自由に動き回って時間を過ごしてもらえることを共有しました。途中で抜ける人や新しく入って来る人がいて、自分も話題に貢献できなくなったら移動するというあり方で進めます。



さあ、スタート！

ここまで共有したところでいよいよスタート。ホストが20人くらい出て来てくれるといいなというイメージです。話したいテーマが見つかった人は円の中央に出て来て紙に書きます。大きな輪の真ん中に出るだけでもちょっと勇気があるもの。それだけにどうでもいい話ではなく、大事な話題が出て来るのがOSTの面白いところ。スタートしてしばらくの動かない時間を全員で堪え、ホストが一人現れました。紙にテーマを書いたら全員に見せながら、話題を出した思いや理由を伝えます。会場は自然と拍手に包まれ、その後も少し間をおいて一人また一人とホストが登場してきました。

出てきた話題は多種多様。「楽しい！が遊びの原点」「今きている子どもたちと何ができるか」「共有したい大切なこと」という、原点や本質に立ち返って考えようという呼びかけ。「プレーリーダーが関わるべきは大人」「分かり合ってきもちいい。だけど心配」「ムチャぶりは遊びのはじまり」という、深めてみたい実体験の共有。「ママたちとつながるためには」「PLAY BB (バーバ) / GG (ジージ) の役割」「プレーリーダーと世話人」という、自分の立場から見える役割についての議論。「新しいメンバーの開拓は」「四国に遊び場を広めたい」「北九州で常設プレーリーダーのいるプレーパークを作りたい！どうやったらできる？」「組織づくりヘルプ！」という、まさに事が起ころうとしているところのお助け要請。「遊びを主の生業にして生きていきたい」「帰ってまず何を？」という若手のこれからに繋げていこうとする意気込み。「保育園・幼稚園はプレーパークになる」「学校は絶対にプレーパークにならない」という、社会の中でのプレーパークのあり方を問う対話。



話題が出尽くすのを見計らって、ホストにテーマの紙と目印の風船を持って会場全体に散らばってもらいました。参加者がそれぞれに関心のある話題を訪れ、徐々に対話が始まります。前に立つ“えらい人”だけが議論して“正解”を決めてくれるのを待つのではなく、必要な人が必要なところに、貢献できる人が貢献できるところに、それぞれ関心を向ける先に集まって話をする。「明日」の現場に持ち帰るための、建設的で本質的な話があちこちから聞こえ始めます。それぞれの話題はそこから派生して新たな輪ができたり、合体したりもしながら展開し、会場はたちまち活気に満ちていきました。



「遊ぶ」支える社会の中で

「遊ぶ」を支える社会を考えると、私たちそれぞれに担う役割があります。それは必ずしも全員が声を上げて呼びかける役ではなく、呼びかけに応じて力を合わせる人、様々なところを渡り歩いて智恵を交差させる人、活動家ではないが関心を寄せる人、様々なあり方があります。経験を積んで伝えるものを持つ人はもちろん、これから始めようと奮闘する人もまた、考えるきっかけや協力できる機会を提供し、人々が躍動する場を生み出して大きな貢献をしています。今回の全体会の場は、まさにそうした社会の縮図であったと言えるのではないのでしょうか。まだまだ続けたいところでしたが、最後にこのことを振り返って共有し、各テーマでの議論の幅広さと豊かさを概観して、全体会は幕を閉じました。

時間が十分でなかったこと、会場が手狭だったこと、進行・運営が未熟だったこと、様々な課題もありました。しかし、そうした中でも、集会の最後に若いのが前に立ってしゃべり出し何をし出すかというときに向けられた、あの温かなまなざし、そして、それぞれのあり方で力が発揮され、あの場にみなぎった活力こそ、「遊ぶ」を社会で支える源だったように思われてなりません。参加者のみなさん、本当にありがとうございました。



実行部隊紹介

PLAY FUKUOKA

2005年に福岡プレーパークの会として発足。遊び場づくりの中間支援団体として活動ののち、子どもの遊びを取り巻く様々な環境での活動に展開し、2012年に改称しました。乳幼児親子のプレイパークや、PTAや地域の活動としての遊び場づくりの応援、学童保育の指導者や幼稚園の先生等へのワークショップを取り入れた講座等、子どもの育ちを支える遊びが日常に広がることを願って活動しています。また現在、福岡市が行う放課後等の遊び場づくり事業の人材育成を担い、一般向けのプレイワーカー養成講座や通年で取り組む学生プレイワーカー育成講座を開いています。

ふくおか遊び場小集まり

福岡で全国研究集会が開催されるにあたり、事前に福岡県内各地で活躍する遊び場づくりの実践者のみなさんと小集まりを開催しました。全国からの仲間を迎えることにワクワクドキドキを感じながら、どのような集会にしたいか意見を交換しました。各地での日常の活動の中、時間を合わせて足を運んでもらうのはそれぞれ負担もありましたが、各地の近況を報告し合って悩みや智恵分かち合い、エネルギーに満ちた時間を過ごすことができました。現場の写真を持ち寄ってつくった福岡の遊び場を紹介するスライドショーを当日上映した他、分科会の担当や運営にも快く協力していただいて、福岡開催を地元から支える礎となりました。

当日学生スタッフ

集会の裏で会場を駆け回り支えてくれた若手は、学生プレイワーカー育成講座の受講生や卒業メンバーでした。参加のつもりでやってきたところ、PLAY FUKUOKAの運営スタッフが慌ただしくしているのを見かね、心を寄せ、機転を利かせてくれました。2008年より毎年、子どもたちと遊び、共に学んで卒業していく学生たちは、それぞれ、保育や教育の現場、児童相談所や行政機関、民間企業などで活躍し、今でも頼れるパートナーとなってきています。



新人PLはミタ

～若手プレーリーダー、全国集会见聞録！～

全国集会の楽しみの一つと言えば、若い人たちの活躍を目の当たりにできること！という人も多いでしょう。実行委員として開催を支えた福岡の学生プレーワーカーたち、そして見るものすべてに目を輝かせていた、若い参加者たち…。今回のプレーリーダー研究所では、全国集会で爆発したヤングパワーの一端をお伝えするべく、二人の若手プレーリーダー編集委員が研究をかねて突撃取材をすることになりました！

今回突撃取材をした編集委員（新人PL）あんこ（松村晃子：羽根木プレーパーク・東京都世田谷区・1年目）ひる（蛭子井里江：冒険松原あそび場・埼玉県草加市・2年目）

※ちなみに、あんこは「PLAY FUKUOKAのプレーワーカーにして、この全国集会のキーマンである実行委員の「あいあい」こと梯愛依子さんに密着取材する」、ひるは「フリーに動いて、たくさんの人と話をして、その聞いたこと、話したことを報告する」というタフな研究課題に取り組むことになりました！！

あんこの あいあい 密着レポート

8
24

10:00
博多のホテルを出発し、会場へドキドキ。

10:40
今回密着させてもらう、あいあいと出会う。

この全国集会のキーマンという話だったけど、ホント、いきなり忙しそう……。今は基調プログラム用の映像をセッティング中で、話しができる雰囲気じゃない。どうやって関係を作っていくといいんだ～！

11:00
プレプログラムスタートの予定時刻だけどまだ始まらない。



あいあい、走る走る!! わたしも走って追いかける。いきなり見失いそうになって焦る～



11:08
都合により、急ぎよ基調プログラムの映像を5分に縮めることになったらしい。あいあいPCとにらめっこ中。

11:19
いよいよプレプログラムスタート。このメガネをつけていると会場のみなさんがよく見えます。これから早く来た方だけに秘蔵映像を流します!

「いや、私も初めてなんで!」
「なんかなんか恥ずかしい!!」(笑)
「なんかすいません、こういうの初めてやるんで!都合悪かったら言ってください。」

ステージ!! 普通に司会しちゃってよ!!

この余裕、手際の良さ。なに? この人ホントに同期年代か!

アレ? 変なメガネをかけたあいあい、マイクを持ってみんなの前に出る…。もしかして、この人全国集会の司会するの? マジか? 学生って聞いてたぞ! でもあいあいは余裕の表情で、挨拶を始める!

ところがその秘蔵映像の音声が小さくて聞こえない! でも、慌てずふためかず、ニコッと笑って「音声が小さいので、先にこっちを流しますね。」と別の映像に切り替え、それからスピーカーを取りに走る!

アクシデント発生!!

12:03
開始早々のトラブルを見事に乗り切り、プレプログラムが無事終了。お昼休みへ…と思いきや、あいあいたち実行委員さんたちは次から始まる基調プログラムの準備へ。休憩は…、取るヒマないっすよね。

13:03 基調プログラムスタート。
あいあい、今度は司会の2人のアシスタントをしたり、映像を切り替えたりなど基調プログラムの進行をサポート。この人、ホントにこの全国集会のキーマンなんだ! そんな忙しそうなおいあいのそばに時どき子どもが近付いていく。そうか、地元福岡だもん、顔なじみの子どもたちもいるよな、と思ったら、なんと初めての子たちだったらしい! 現場でのあいあいはどんな風なんだろうな～。



15:11 基調プログラム終了。
次の分科会会場へそれぞれ向かう。

私も、あいあいの密着を一時離れまーす。

「愛の懸け橋」なんです♥
「めっちゃ素敵な名前ですね。」

17:10 夕食までの間にお風呂をいただく。
18:55 夕食後、食堂の外であいあいとこうもりさんが懇親会の打ち合わせ。私も実行委員の皆さんと共に懇親会の飲み物の到着を待つ。実行委員長の高賀彩子さん（以下、彩子さん）や協会新代表の関戸さんも来て、しばし休憩。この日初めてあいあいとゆっくり話してきた(笑)

分科会終了後、夕べの集いに参加。

こうもり (野島智司さん：全国集會事務局)

…という他愛ない話からはじまり…
彩子さんとはあいあいが大学1年生のとき参加したPLAY FUKUOKAの学生プレーワーカー育成講座で出会い、その後ずっと活動を共にしてきたそう。そして今回の全国集會、例年よりも大学生のボランティアスタッフが多いそうです!

高賀：大学生はすごくたくさんの可能性を持っている。が、世間では「扱いやすい」などと学生を便利屋のように使うところも少なくない。学生をきちんと尊重し、頑張ってくれたことやどんな思いで関わろうとしてくれているかについて、きちんと話をすることが大切。…お話しできたのは、この一瞬だけでしたが、彩子さんはほんとにステキな人でした。それについていく、あいあいの気持ち、分かるな～。

懇親会用の飲み物が到着。クーラーボックスに移したり、お菓子おつまみの仕分けなど、会場セッティングをお手伝い。

懇親会スタート。大盛り上がり！

皆さんお酒を片手にしゃべるしゃべる。なんというか、最近思ったのだけど、冒険遊び場づくりに関わる大人たちって本当に元気だ。

懇親会ではほぼ経験年数の同じプレーリーダー（プレーワーカー）たちと話した。お互いが勤務する遊び場の様子を話し合ったり、「新人ならではの悩みは？」「分科会、どうだった？」など、話は尽きない。
正直、全国集会にこんなにくる自分と同じくらいの経験年数のプレーリーダー（プレーワーカー）たちが参加しているとは思ってなかったので、驚いたと同時にとても嬉しかった。
他の遊び場のリーダーと横のつながりを作りたいという、個人的な目標があったので、今回の出会いをきっかけに横のつながりの輪を大きくしていきたいと思う。



**全国集会で
ひるの
聞いたたり
話したこと**

いきなり、懇親会からでゴメンナサイ。

ここまで、ゆっくり誰かと話せる時間がありませんでした。懇親会では、地域ごと（関東、東北、九州など）に分かれて席に着くようセッティングされていました。でも私は、違う地域の人と話したいと思ったので、乾杯をしたらすぐに福岡の人たちが座っているテーブルへ移動。
ご一緒させていただいたのは、楽しくも切実な紙芝居を披露された冒険おかがき（福岡県）のスタッフさんたちとその子どもたち。隣にいた妹尾里美（せのっち）さんに話しかけてみました。4〜5歳くらいの男の子のいるお母さんです。

ひる：どうして遊び場に関わり始めたんですか？

せのっち：自分の子どもがいるから。それがいちばんの原動力。子どもを遊ばせたいと思ってやったけど、結果、自分が救われました。

ひる：みなさんは、どうやってつながったんですか？

せのっち：友だち同士の口コミで。もともと、外遊びに興味があったり自然の中で遊ばせたいという想いがありました。幼稚園の知り合いと mixi でつながっていて、そこに、想いを書き込んだりしたら「私も」「私も〜」という感じで広がっていったり…。とにかく遊べる所がなかったんです。それなら、自分達でつくっちゃおう！って。

ひる：私が今いる冒険松原あそび場も、かつて地域の人が草加市の公園を調査したりして、「子どもたちが遊べる場所がない」と行政に働きかけてつくられたそうです。

せのっち：つくる前は、知り合いのいない公園に行っていました。子ども同士で何かあったらすぐに大人が入るから。

まちのためじゃなく、自分のため、子どものためにやってたけど、いつの間にかスタッフになってました。

ひるさんは、どうして遊び場に興味を持ったの？若いのにすごいよね。

ひる：大学の時に、地域の人たちと一緒に人と人が関わる場をつくる活動をしていて。その時に子どもたちが自由な時間に放つエネルギーがすごいとか、子

どもっておもしろい、遊びの力ってすごいって感じて、興味を持ちました。

せのっち：子育て中の親って、孤立しやすい。こう言われたらどうしようとか、すごく考えちゃう。だから、子育て中の人には、ちょっとでいいから声をかけてあげて。ちょっとでもいいから。

せのっちさんと話して思ったことは、「冒険遊び場づくり」には、子育て中の孤立しやすい親を助けるチカラがある、ということ。そのことを現在進行形で実感している人から直接話を聞いたのは、とてもよかったです。特に最後の一言は身にしみました。今私がいる現場のスタッフには、若いお母さんはあまりいないので、新鮮でした。

21:31 懇親会終了

ゴミ拾いとが、あまったお菓子たちの回収などをお手伝い。そのまま大人たちは別の部屋に移動して、懇親会の続き……

その頃実行委員のみなさんは、明日の全体会の準備をしていた。

22:00 別室に移動

声のボリュームに気をつけながら懇親会の続き。
（ぶんちゃ：須永力・協会理事）を中心に、世田谷・新宿・横浜のプレーリーダーたちと話す。ぶんちゃと話せる機会なんてそうないのですが、ちょっと眠くなってきたので私は退散……（他のみんなは3時までやってほしい！）

**同じ部屋の
プレーリーダー
たちと話す**

年齢も近く、現場もそこそこ近い同じ部屋のプレーリーダーたちと話した。まりな（上田真利那：光が丘ひろっぱプレーパーク・東京都練馬区）、さっちゃん（小池祥子：のざわテットーひろば・東京都世田谷区）、わらびー（峰若菜：YPCネットワーク・神奈川県横浜市）

まりな：去年度まではベテランの二人がいて、そこに常勤1年目の私だったけど、今年度からは、私と新人の二人。大変だけど、自分の判断でできるのが楽しい。

さっちゃん：そうだよな〜。お母さんたちも臨機応変に動いてくれるし。

まりな：でも、私が何か一つのことにとらわれてると、現場が回らなくなることも。例えば、土日は子どもたちとじっく

り遊んでいたりとすると、全体が見切れない。初めて来る子も多い現場。だから、私はなるべく常に全体を見られるよう動くようにしてる。

ひる：わらびーは月に10箇所も現場を回るんでしょ？大変じゃない？

わらびー：今はあちこち行く動きに慣れた。逆に、常駐は大変だろうなと思う。その場その場に外からの視点や、他の場所でのおもしろかった遊びを持ち





前ページから



込んだり、なるべくそういう動きをする。

ひる：うちでは、リーダーが有休取る時に他からプレーリーダーが来る。そうすると、あ、ここは他から見るとこんな風に見えるんだ〜ってわかる。時どき外の人が入ってすごいと思う。

わらびー：同じリーダーと2人ってどう？

まりな：2人って難しい！

さっちゃん：3人だと1人が中和役になれ

るからいいよね。

プレーリーダーの認知度を もっと上げたい

ひる：最低限、子どもと関わる人には知ってほしい。小学校の先生とか幼稚園の先生とかも。

さっちゃん：保育園で実習した時に、保育者という立場で無意識に子どもに「そんなことしちゃダメでしょー」って言うちゃった。子どもたちにしたら自然な行動だったのにな。

逃げなきゃー!!って思った。

まりな：そこでそう思えてよかったね。

さっちゃん：そこに浸かると、それが当たり前になっちゃう。

まりな：冒険遊び場はカウンターカルチャーだよ。何か現状に対抗してるもの。これからは、世の中に「このままじゃいけない」「これがダメ」って言うだけじゃなくて、もっといろんな人といいところを共有していかないと広まらないと思う。

さっちゃん：あと、もっと遊び場に対しての「こわい」って気持ちを大事にしないと。「ダメ」って言うちゃダメ、っていうのもダメじゃない? (笑)。

8
25

08:51

朝ごはんを食べ、モーニングプログラムに参加。昨日の夜ふかしで少し眠い。モーニングプログラムから、そのまま次の分科会へ。午前中は密着取材というよりも一般参加者として過ごしていました。



朝食をいただきながら

さっちゃん：私はドイツの森の幼稚園に行ったのが決定的。こどもたちの心が自由な姿、保育者との関係性に惹かれた。ケンカしてても先生が見守ってた。日本では、あんまり見られなかったから...で、似たような雰囲気をもったテッターにはまった。

ひる：そういえば、佐藤さんは、どうして遊び場に関わり始めたんですか?長い付き合いだけど、聞いた事なかったですね。

佐藤：結婚して子どもが生まれて、それで子ども(思春期の子も含めて)に関わ

ることができないかって探して、そしたらネットで見つけた。うち、姉も妹も高校行けなくなって中退しててね。みんなと同じじゃない、学校行ってないってだけで、すごく辛い思いをしているのを見ていたの。それで、不登校の子などの居場所に興味を持って、自分でも何かしたくなった。

で、いろんな遊び場を見に行っただけで、これだ!と思って知り合いになったお母ちゃんと二人で始めたの。

ひる：そんな思いがあったんですね。

佐藤：そうだね。なんで遊び場づくりに関わったのか、動機って、色々あるよね。きっかけは言えても、思いは一言じゃ言えない。

ひる：はい、話すすと長くなりますよね。

佐藤：この前、たねの会の新メンバーもいる会議で、あらためてみんなの思いをきいてみよう、ってしたら、すごく長くなった(笑)。



これは昼ごはんですが。

第6回 冒険遊び場全国研究会 in 福岡



モーニングプログラム たごっこ発、HKT48 劇場の感想を聞く

10:15

ひる：たごっこプレーパークで遊ぶ子どもたちの様子を紹介した動画「HKT48 劇場」を見ての、感想をお聞きしていますか?

あっこちゃん：おもしろかった。何でもありだな〜、自分たちはまだまだ制限してるな〜と思った。たごっこは、雨でも中止にしないとかね。

遊び道具も色んなもの使って遊びの幅を

広げてた。うちは常設じゃないから、いつも置くのは無理だけど。

りえぼん：冒険おかがきの主旨として、自然の素材を使った遊びにこだわってたけど、より子どもたちの自由を尊重してるところにびっくり!子どもたちの心に寄り添っているのがいい。

ひる：いいですよ!子どもたちのありのままをおもしろがっているのが。

りえぼん：冒険おかがきは、年齢の近いママ仲間やってるでしょ。やっぱりお母さんだから、禁止しがちなんだよね。

だから、パパや若いスタッフを増やすことを心がけたい。あと、木とか水とかを使おうって、こだわらなくてもいいんだな、「物」じゃないんだな、大事なのは、「人」だなって思った。

ひる：何をを使うかが大事ではないですよ。そこにいる人がどう関わるかで、いくらでもおもしろくなりますよね。

りえぼん：もう少し自分に余裕ができてきたら、子どもたちの居場所づくりということにもっと重点をおいて、一人一人にスポットを当てていきたいと思った。



13:35

午後の全体会が始まる。

分科会の成果を発表。

OST 参加者全員が1つの輪に。

各分科会のまとめが発表された。やっぱり他の分科会も面白そうだった。その後、オープンスペーステクノロジー（OST）という手法を使った語り合いの場が設けられた。その進行役を担ったのは、やっぱりあいあい！緊張する場面だと思うけど、そうは見えなかった。今回の OST では話題提供者が 20 名ほど出ることが期待されていたが、15 名ほどで一度頭打ちに。諦めて会を進めるのか、それともやはり話題提供者を待つのか？進行役としてかなり難しい場面だったが…彼女はニコリ微笑んでこう言いました。

その言葉に触発されたように、数人の話題提供者が登場して、見事に理想的な人数が揃いました！あいあい、本当にスゴい！

「聴くことは理解を示すこと、待つことは信頼を示すこと」
わたしの大好きな言葉です。



プレーリーダーが関わるべきは大人！！

どっくん：プレーリーダー（以下 PL）は大人と子どもの緩衝になる、軟骨のようなもの。例えば遊び場で子どもがやりたいことを親がストップしそうな時に PL が間に入ることで、事態が好転することもある。



PLは、行政との信頼関係をつくる役割もある。遊び場を開催する際の、もしもの時の対策や提案を行政に示しておく、行政も「それなら」と協力しやすくなって、子どもがより遊べる環境が作りやすくなる。自分が親になったのも、大きなこと。親が何を欲しているのかがわかるようになった。まずは大人との信頼関係をつくるのが大事。

X：どうやって関係性つくるの？



おかび：挨拶がきっかけになるかな。何気ない雑談をしたり。友だちになる感覚で話しかけてみる。

どっくん：雑談力が大事だね。遊びの中での子どもの変化を親に伝えると、遊びの大切さや認知度をあげることになる。

ひる：新しく運営者になってくれる人

を誘うタイミングがわからない。常連のお母さんを誘って、遊びに来ずらくなったらイヤだし、やりたいなら自分から「やりたい」と言ってくれるかも、と思うと、こちらから誘わない方がいいのかな…と思って、今は特に運営に誘う声はあまりかけずにいる。みなさんはどうですか？

Y：その人自身のタイミングを待たりたいと思う。ベンチのあるところに行くのに2ヶ月かかる人もいれば、一日で行ける人もいます。

どっくん：どうしたら運営者になれるか？なったら何をするのか、ということが明示されているかも大事だね。

でもやっぱり、当事者（運営者）が誘うのが一番。乳幼児連れのお母さんがスタッフになると、若いママスタッフが急に増えることもある。ただ、それをしやすくするのも、PLの仕事だと思う。

子どもと関わるばかりが PL じゃない。PL を呼ぶ声が多い時は、遊び場がうまく回っていない時。僕はよく遊び場全体を水路に例えるんだけど、要するにどこかが詰まると、全体がうまく回っていかないんだよね。例えば、子どもが使いたい道具や素材をパツと取れないとか、「コレやってみ

い！」という気持ちをくすぐる仕掛けに乏しいとか。流れが詰まって、子どもが遊べなくて困るから「なんとかしてくれ！」って PL が呼ばれちゃう。

あと、自分自身の中にも水路があって、それが詰まると、全部がうまく回らない。例えば、現場を開く前の下準備ができていない時。倉庫の中がごちゃごちゃだったり、地域の人々の理解がきちんと得られてなくて、苦情の対応に追われてしまう時。そういう時も、PL がよく呼ばれる。

ひる：私、自分の水が詰まってます！…と、最後は自分の個人的な課題に気づいた OST でした。

私は現場で、「今日は子どもから何十回呼ばれたんだろう…」と思うことがたまにあったので、この話は参考になりました。どうしたらそうならなくなるかを考えよう、呼ばれたからその人のところへ行ってその時直接関わるだけじゃなくて、その周りの環境ともっと関わって、遊びやすい場をつくりたいと思いました。

たくさんの人と話せて、たくさん気づきを得られた全国集会。今回学んだ様々なことを現場に活かしたいです。



15:01

語り合いの場から出たキーワードを「遊び」と「社会」になぞらえてまとめ。

最後に彩子さんの号令で、手伝ってくれていた学生・青年スタッフのみなさんが前に出てくる。（実は昨夜の段階では、みんな前に出たがるタイプじゃないって話しをされていたので、出て来てくれて嬉しかった。）お疲れさまでした。



初めての全国集会、普通の参加とは違った方向から参加することになりましたが、とても勉強になりました。考えることも、心に留めておきたいことも見つけました。そして、あいあいはじめ、たくさんの人と交流することができて嬉しかったです。



秘密のお手紙を交換する、というプログラムで、初めて出会う人同士の距離が縮まった。



遊ぶを社会で支える人が一堂に会した。また3年後にお会いしましょう！

第6回冒険遊び場づくり全国研究集会を終えて

関戸まゆみ（日本冒険遊び場づくり協会 代表）



文字通り暑いアツイ夏の2日間。「第6回冒険遊び場づくり全国研究集会 『遊ぶ』を社会で支える」は、たくさんの人の思いと力が集まり、盛会のうちに終了しました。初めて九州に渡っての全国研究集会でした。大変な準備も、テレビ会議の利用や作業のスリム化、初めてのWEB 申込システムなど新しい工夫満載で、実現にこぎつけました。現地福岡では、たくさんの若い方たちの大活躍で、エネルギーに満ちた、素晴らしい集会になりました。後日、各所で福岡の方々への感謝の言葉が飛び交っていたのを見ました。

会場の福岡県立社会教育総合センターは、合宿で研修やスポーツをする団体が同時に利用していましたが、私たちの集会には、小さいお子さん連れで参加している方をたくさん見かけました。とても嬉しいことでした。東京は便利だからと、遠方からいろいろな集まりに参加する旅慣れた方もいらっしゃいますが、活動に関わっている子育て中の親も、こうして全国の仲間と顔を合わせ親しく交流し、情報交換や研修をする場面はとても大事だと思うのです。本当に福岡でやれてよかったとしみじみ思いました。やはりご当地の方の参加は特別多く、また次は違う地域で開催できるというなとも思わせられました。

閉会時には、全員で記念撮影。各持場に散っていたスタッフも前列になだれ込みました。全国研究集会でこんな風にみんなの集合写真を撮ったのは初めてでした。

さて、基調プログラムのビデオメッセージでみなさんにお目にかかった大村虔一代表は、9月1日より名誉代表となり、新代表を関戸まゆみが務めています。しかしいへん残念なことに、大村名誉代表は2014年1月6日75歳で逝去されました。

大村虔一さん、大村璋子さんのご夫妻は1973年にレディ・アレン著『都市の遊び場』を翻訳出版したことをきっかけに、東京の世田谷で遊び場づくりを始められ、その流れが、今のNPO法人日本冒険遊び場づくり協会に続いています。大村璋子さんは2008年暮れに他界されています。今私たちは、お二人の歩みを引き継ぎ、それぞれ前に向かって進まなければならないと思います。心よりご冥福をお祈りします。

これまでの全国研究集会

第1回	1998年11月	東京・国立オリンピック記念青少年総合センター
第2回	2001年6月	東京・国立オリンピック記念青少年総合センター
第3回	2004年11月	神戸・兵庫県民会館、西宮・兵庫県立総合体育館
第4回	2008年1月	東京・国立オリンピック記念青少年総合センター
第5回	2010年10月	横浜・野島青少年センター

参加者アンケートから

研究集会の最後に、107名の参加者から振り返りのアンケートを寄せて頂きました。

回答者の約8割が女性です。

都道府県別に見ると回答者の半数を超える人が福岡県（60名）で、東京都（11名）、神奈川県（5名）、鹿児島県（4名）と続き、全体では20都府県からの参加がありました。

また参加団体の数は、66団体となりその中には行政4、教育機関2、法人3が含まれています。

アンケート回答の把握整理は、4つの設問ごとに行いました。

回答に複数の文意があれば、切り分けて近い意味の文章を寄せて行きました。文章の体裁を整えたもの、趣旨を取り違えていたものを多少整理しましたが、ほぼ原文のままです。

設問と照らしながら、回答という参加者の視点から研究集会を振り返って頂ければ幸いです。なお表中の「区分」は整理に際して設定した便宜上の表現です。それぞれの「区分」毎に、代表的な回答を取り出して太字表記しました。また設問のすぐ次の行に設問を代表的な回答を抜き出し太字表記しました。従って太字表記のみを追いかけることで設問回答の概括を把握することができます。

1. 大会テーマ『遊ぶ』を社会で支える』に対して、あなたは本集会を通してどのように受け止めましたか。

社会を知らない自分がいました。社会では遊ぶことを考える時代なんやーん。うらしまろ子でした。

遊びを社会で支えなければいけない現状がある。

自分にも出来ることが沢山ある。

もっと広く社会に伝わる言葉を使えるようになりたい

同じ想いの大人を少しでも増やしていきたい

たくさんの方が関わっている遊びの場は、素敵な社会なんだなあ

「遊び」が社会を支えるのかな。

あやぶってやっぱりすごい！遊ぶことを話していると、みんな仲良くなっていく。

子どもも大人も一緒に”遊ぶ”ことでもっともっと楽しい社会、笑顔あふれる社会になる

子どもにとって、本当に遊ぶって生きることなんだなと思いました。

沢山の人の話を聞き、自分たちの場所にあった居場所作りがほしい

あきらめずに、続けていかなければ…と決意新たにしています。

全国で、熱い思いを持って活動されている方々にふれて勇気を頂きました。

まだうけとめきれないです。

2. 本集会に参加して、良かったところ、自分のために役立ったところなど、ご自由にお書きください。

大人の意識の共有に頭を悩ませていましたが、共有とはみんなの意見を出し合うこと。

共有≠共通理解だという言葉が他の人から言われて、心の中にストンと落ちました。

自分の中で考えていた以上にいろんなヒントを頂き本当に良かった。

たくさんの方々の想いを体で心で感じられ、とても心が満たされました。

多くの仲間がいる事が分かった事

熱い大人たちの言葉がきけて良かったです。

準備など大変だったと思いますが、この二日間、本当に濃い二日間でした。

深く考えすぎず、遊び心！ひらめきみたいなことも大事にしたいと思った。

コミュニケーションの大切さ、しかけるところから始まる。

いろんな土地のプレーパークの話聞くことが出来て良かった。

プレーパークについての新たな観点を得ることができました。

プレーリーダーについてのいろいろなあり方、育て方など聞くことが出来た。

私に何ができるのか考えさせられました。

スキルのある方の考え方、先端の情報などもこれから生かせようです。

3. あなたは、これからどのような冒険遊び場づくりをしていきたいですか。

特別なことなんてない、”子どもたちにとってあたりまえ”に遊べるところ。

生きること自然に経験できる遊び場。
 やりすぎず、見守る姿勢を大切にしていきたい。
 日常的に小さくても楽しく遊び場を続けていきたいです。
 遊びをきちんと受け入れられる場であり、自分の心の遊びたい!と思える場、空気。
 近所の公園や校庭で面白そうなダイナミックな遊びもしてみたい。
 遊びつくしても遊びきれない。子どもの時間を大切にしたい。
 子どもにとって居やすい場。
 大人も育つ、地域の居場所としてのフレイパーク。
 皆が(色んな人が)立ち寄って楽しんでいく場づくり。
 町役場と遊び場を作りたいという人たちの意思疎通をはかる広場でありたいです。
 子どもたちが何でもなくふらっと来るような場所。
 日常と切り離さないで、いろんな可能性を模索したい。
 フレーパークの理解者を増やしていきたい。
 色んな人とつながる、つながれるフレイパークを開催していきたい。
 あたたく見守る。大人も増やしたい!(地域に)
 出来ることを出来るところから、楽しんで!!
 まず、スタッフみんながフレイパーカーになる
 発信し続けること!!
 子どもが”自ら”動き感じる遊び場を作っていきたい。
 楽しい遊び場ができたらいいな。
 エコなことで遊びが一緒になる、高齢者も含めて。
 素材にあふれた限定しない遊び場。”場”の意味を広げたい。
 今もらったエネルギーを大事にします。

4. その他、ご自由にご意見をお書きください。

8年後なんて待ち遠しい!! 次回もぜひ参加したいです。

とても温かくていい運営でした。
 全部の分科会に参加したかったです。
 あいあい、進行素晴らしかったよ!!
 シークレットフレンドの相手が見つかりませんでした。
 あっかった!
 少々時間がキチキチでした
 この集会のごとは偶然知り得た
 福岡に来てよかったです。
 貴重な二日間を過ごすことができました。
 分科会・全体会すっごく楽しかったです。
 私はもちろん、多くの方がここで沢山の力をもらったと思います。
 色々な視点からの意見が出ていて楽しかったです。
 さまざまな人達とお話しができました。
 長年かけて冒険遊び場をしてきた方、最近参加した私からすると本当に尊敬です。
 懇談会で、もっと他の地域の人と話したかったです。
 まずは、近所のコミュニケーションをつかっていこうと思います。
 また会いましょう。
 次も参加したいなーと思います。
 いろんな方の言葉が心に染みしました。
 さまざまな事例や、さまざまな人の考えに触れることが出来て、来てよかったと感じました。
 今後ともよろしくお願ひ致します。
 御苦労さま、お疲れ様、
 あまりお役にたてなくてすみません。
 ここの出会いに感謝!!

参加者数

性別	人数
女性	144
男性	77
不明	1
合計	222

都道府県別参加者数

都道府県	人数
北海道	1
宮城県	5
山形県	1
福島県	1
茨城県	1
埼玉県	10
千葉県	4
東京都	21
神奈川県	14
岐阜県	1
静岡県	4
愛知県	2
大阪府	2
兵庫県	2
島根県	2
岡山県	10
広島県	4
香川県	1
愛媛県	1
福岡県	112
佐賀県	1
長崎県	6
熊本県	1
大分県	4
鹿児島県	8
不明	3
合計	222

スタッフアンケート

第6回冒険遊び場づくり全国研究集会事務局

今回の冒険遊び場づくり全国研究集会が無事に開催できたのは、参加されたみなさまのなかから多くの方が自主的に動き、支えてくれたからに他なりません。多くの方が自主的に動いてくれたのは、手づくりの集会ならではの良さとも言えますが、そこに依存してしまうことはリスクが高く、また一部に負担が集中してしまうおそれもあり、必ずしも望ましいこととは限りません。

そこで、次回開催のときの参考になればと思い、閉会後に全国集会事務局で急遽スタッフアンケートを作成し、全国集会事務局や冒険遊び場づくり協会に所属していないのに当日動いてくれたスタッフ7人（後日連絡をとれた方）に配布いたしました。そのうち4人から回答を得ることができましたので、ここに、その内容をまとめてご報告いたします。

1. スタッフになった経緯

- ・事前に自ら申し出ていた なし
- ・関係者から事前に依頼があった 1人（託児・1～2ヶ月前）
- ・関係者から事前に募集があって応募した なし
- ・当日、様子を見て自主的に 2人
- ・関係者から当日に依頼された 1人

今回アンケートを配布した経緯からも予想された通り、事前に依頼があったのは託児スタッフだけで、その他の当日スタッフは当日に自主的に、もしくは当日に依頼されて関わった方々でした。

2. 仕事内容

■開会以前

- ・資料準備（当日使用パンフレット等）
- ・託児スタッフとの調整（前日までプログラムの時間が決定しなかったため、ワーカーさんたちの苦勞が伺えたので申し訳なかった。）

■1日目

- ・プレプログラム、基調講演などの会場設営（椅子・テーブル準備、機材の準備）
- ・駅からの道案内
- ・タクシーの手配
- ・篠栗駅で電車で来る参加者のタクシーの乗り合わせの対応
- ・足りなかった資料の追加印刷、パンフレット不足分の手配
- ・来場者案内（宿泊施設、会場案内）
- ・駐車場整理
- ・遊び場づくり協会の担当者の方と分担して、物品の販売・お金の管理（バザールコーナー）
- ・シアタールーム設営
- ・見張り（シアタールーム）
- ・備品管理、荷物運び（分科会）
- ・分科会1への案内以降、後半20分のみ参加
- ・1日目は、プログラムの時間が押したので、心配したが、ワーカーさんの対応が慣れていたので良かった。（託児）
- ・荷物運び（懇親会）
- ・分科会や基調プログラム、プレプログラムで使用する機材の手配、分配
- ・資料、機材の整理（全般）

■2日目

- ・備品管理、荷物運び
- ・分科会2で使用するプロジェクターなどの準備と回収
- ・分科会で使用するプリント印刷
- ・アンケート集め（分科会）
- ・会場設営（全体会）
- ・ペン、椅子などの準備、全体会で使用する模造紙等の準備（全体会）
- ・落とし物のアナウンス（全体会）
- ・タクシーの手配
- ・モーニングプログラムから閉会式までの間のバザールコーナーの見守り
- ・販売、お金の管理（バザールコーナー）

■閉会后

- ・社教センターから借りていた物品の回収
- ・各分科会で使用した物品の回収
- ・各部屋のそうじ、講堂のそうじ、椅子などの片付け
- ・各分科会会場の現状復帰

■その他、全般

- ・宿泊施設の確認（各部屋の布団、そうじなど）
- ・帰りのタクシー手配
- ・後片付け

当日スタッフの仕事内容は多岐にわたり、託児、誘導、会場設営、撤収、備品管理、金銭管理、資料印刷、その他雑務など、当日発生した作業のみならず、あらかじめ予想できたはずの作業が多かったことがわかります。託児こそ事前の依頼を行ったものの、今回の全国集会の開催に、自主的な協力スタッフの存在が不可欠であったことが窺えます。

3. 参加できなかったプログラム

- ・プレプログラム 3人
- ・開会式／基調プログラム 3人
- ・1日目の分科会途中参加 1人
- ・懇親会 なし
- ・モーニングプログラム 2人
- ・2日目の分科会2 3人
- ・全体会／閉会式 3人

- ・バザールコーナー なし
- ・シアターコーナー 1人
(複数回答)

集会そのものに参加しに来たはずなのに、当日スタッフになったばかりに、多くのプログラムに参加することができなくなった、もしくは制限されたことがわかります。

4. 困った点、改善点など

- ・今回の第6回全国集会は、PLAY FUKUOKA と冒険遊び場づくり協会さんとの共催だったと伺っています。開催にあたり、準備や打ち合わせ等、多大な尽力があったことだろうと思います。当日の動きに関しても、古賀さん、梯さん、野島さんが運営のために走り回っていらっしゃるのを目の当たりにしていました。冒険遊び場づくり協会の方も受付で作業されていました。学生メンバーはもともボランティアスタッフではなく、全国集会への参加者として参加していました。しかし、細かい作業に手が足りていないと感じ、自主的に手伝いを始めました。当日の動きとしても、PLAY FUKUOKA とづくり協会の共催となっているならば、づくり協会の方もしっかりと当日の動きなどについて、打ち合わせが必要だったと感じました。全ての負担がPLAY FUKUOKA にかかっている気がしていました。
- ・篠栗駅での参加者対応の際、何人参加等の情報を把握していなかったため1時になっても社教センターに戻って良いかわかりませんでした。また1日目の昼食も希望していましたが、駅にいたため昼食をとることができませんでした。
- ・備品管理についても協会とPLAY FUKUOKA 双方の持ち込んだ備品数、社会教育センターからの貸し出し物、その他の人から貸し出された物をまとめた物がなく、各分科会会場で必要となる備品数についても書面化されていなかったため、何も分からないまま自分の判断で行動しなければならぬことも多々あり、同じ部屋を何度も往復することもある等非常に困りました。
- ・バザールコーナーでは、団体によっては売上金が放置されているところもあり、鍵も持っていなかったため、部屋をあけることができませんでした。
- ・少し時間が空いても、途中参加だと分科会の内容が分からず、またすぐに別の仕事をしなければならず、ゆっくり話をきくことができませんでした。できることはお手伝いしようという気持ちで行きましたが、分科会等は参加できると思っていたので、結局参加できず残念でした。
- ・当日スタッフとして動くことを事前に知らせてもらえると動きやすかったかと思う。他のスタッフの動きを把握できていれば動きやすかったかと思う。

スタッフに対する運営事務局の対応が不十分であったことがわかります。また、冒険遊び場作り協会とPLAY FUKUOKA との連携がうまくとれていなかったことも指摘されています。

5. 得られたもの、良かったこと

- ・大規模な集会の開催にあたり、裏方の準備の必要性を知れた。
- ・共に準備をした仲間との絆が深まった。
- ・この集会をあそこまで準備された方々へのリスペクトと感謝の気持ち。
- ・自分で考え行動することの必要性。
- ・1人で動くのではなく、全体での情報共有や意思の伝達が重要であることを実感。
- ・今回の研究集会では、情報が少ない中で何をどうするべきか、次に何をすれば効率が良いかと考えて行動することがあったので、自分で考えながら行動することの大切さを実感し、また実践することができたかなあとと思います。また、今回一緒にスタッフとして動いていたPLAY FUKUOKA の学生メンバーと元々役割分担や仕事内容について打ち合わせしていたわけでもないのに、誰が何をするのが良いのか、あの人がこれをしているはずだから自分はこれをしようと考えて動くことができ、チームとして活動することができたのかなと思います。
- ・全国集会の運営として、事務局のみなさまがいかにか大変かが分かりよかったです。私たち以上に事務局のみなさまは本当に大変だったのではないかと思います。また、当日スタッフ同士の絆が深まった。

スタッフ間の絆の深まりや、準備の必要性への理解、自ら考え行動することの必要性、全体での情報共有や意思の共有の必要性への理解、などが挙げられています。

6. その他、運営に関して

- ・分科会には参加できませんでしたが、夜の懇親会や他にも空き時間等で、全国で活動されている人たちとお話する機会をもてたのはとても良い経験になりました。同じ子どもの遊び場づくりの活動をしているのに、それぞれに微妙に考え方や方法がちがったりでお話をきいていて自分もこういうことをしてみたいと良い刺激を受け、非常に有意義な時間を過ごせたと思います。
- ・プログラムづくりなど、福岡での開催ということを考えて事前に様々な現場の人々と話し合いの機会をもたれてあったのが、すごいなあと思った。非常に丁寧だと感じた。
- ・プレプログラムとモーニングプログラム、バザールは子どもがいると落ち着いて見れないので残念だった。子どもを中心に考える研究会なので、ぜひ子どもプログラムを視野に入れて今後は計画していただくと嬉しいです。(外遊び以外の方への依頼。Ex. アートワークショップの展開など)

スタッフ側に属して動いていたものの、それでも集会の参加者と交流することで有意義な時間を過ごすことができたことがわかります。また、プログラム全体の組み方に関しても、特に子連れの参加者としての意見がありました。

7. 総括

事前の十分な案内も説明もないまま、当日あるいは直前に急遽スタッフとして協力して下さったみなさんには、多大なご負担などで迷惑をおかけしてしまい、ここにお詫びを申し上げます。また、今回の状況から考えて、必ずしも「スタッフ」と事務局側で認識されないまでも、運営に様々な場面で協力して下さった参加者がいらっしまったことが想像できます。至らぬ点が多々ありながらも無事に開催することができたのは、協力して下さったみなさまのおかげと考えています。スタッフはもちろん、参加者のみなさまにはあらためて感謝の気持ちを申し上げます。

反省点は多々ありますが、事務局から事前のスタッフ募集、説明、役割分担がほとんど行われなかったことが、何より大きく反省すべき点と考えています。PLAY FUKUOKA 側の負担が大きいとの指摘もありましたが、そもそもそのような状況を招いてしまったことを事務局全体として反省しなければなりません。参加される方にとって、全国集会のスタッフに東京も福岡も区別はありません。事前の打ち合わせの段階を含め、役割分担や協力体制、情報共有の仕方に問題がなかったか、スケジュール、人員に無理はなかったか、反省すべき点が多々あります。

ただし、今回、当日スタッフでスタッフ間の絆の深まりなど、得られたものがあつたことは、次の集会運営をより良いものにするためのヒントです。たとえプログラムに参加することができなかつたとしても、事前の了承があるかないかで、その気持ちには大きな差が生じることでしょう。

参加者とともに作りあげるといふ全国集会の良さを残しながら、一方で、一部の自主的な負担に依存しないために、どのような事務局運営が望ましいか、本報告が次回開催のためのヒントになれば幸いです。

第六回冒険遊び場づくり全国研究集会

実施日 2013年8月24日(土)～25日(日)
会場 福岡県立社会教育総合センター
特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会

